和歌山県有田川上中流域における櫨の民俗

―櫨の栽培・採取に関する民俗技術の継承―

藤井弘章

はじめに

和歌山県では江戸時代から櫨・木蝋産業が盛んであった。ただし、明治時代より次第に縮小し、平成初期以降になると急速に衰退した。令和四年（二〇二二）現在、和歌山県では三～四か所の櫨栽培地があり、櫨の実から蝋を搾る製蝋所は一か所のみとなっている。衰退の一途をたどっていた櫨・木蝋産業であるが、県外の木蝋取引先からの要望もあり、数年前から古老より栽培技術を継承しようとする動きが起こった。現在、和歌山県では、新たな栽培者と以前からの栽培地域、県農林行政部局・林業試験場、製蝋所、地元の高校などが連携することで櫨・木蝋産業の復活が進行しつつある。

筆者は、歴史民俗学的な観点より、近年まで櫨栽培をおこなってきた有田川町の上野保二氏からの聞き取りと、周辺地域での調査を計画した。コロナ禍により調査が思うように進められない部分もあったが、上野氏より数回にわたり、葡萄櫨栽培・採取の民俗について聞き取りすることができた。また、上野氏の櫨の実を買い取っていた方や、地域の方々からも関連情報について聞き取りを実施することができた。和歌山県の櫨・木蝋産業については歴史学的な研究はあるものの〔笠原　一九七三、上川　一九七八〕、民俗学的な研究は少ない〔上野　二〇一七〕。また、有田川流域ではさまざまな民俗調査が実施されてきたが、上野氏が居住する五村を対象とした調査はほとんどおこなわれていないようである。本稿では、五村を中心とした有田川上中流域にあたる旧清水町を対象とし、聞き取り内容をもとに、文献なども合わせて、櫨栽培の民俗についてまとめておきたい。

一　調査地の概要

1．有田川流域と旧清水町地域

有田川は、高野山を水源として西へと流れ、旧花園村（かつらぎ町）、旧清水町・旧金屋町（有田川町）・旧吉備町（有田川町）を通り、有田市で紀伊水道に出る。旧花園村のみ伊都郡であるが、それより下流地域は有田郡に属してきた。有田川流域の北側には東西に長峰山脈が続き、北側の海草郡紀美野町および海南市と接している。南には白馬山脈があり、日高郡と接している。南北の山脈に挟まれた東西に細長く伸びた有田川流域は、ゆるやかに文化圏を形成しているものの、上流域・中流域・下流域において文化的に差異は大きい。

有田川下流域は、後述するように江戸中期より櫨栽培が始まり、製蝋・蝋燭製造業も展開した地域である。おおよそ現在の有田市に該当する。江戸初期よりみかん栽培がおこなわれ、廻船を利用して江戸などに出荷した。明治以降は除虫菊栽培が広がり、蚊取り線香産業が発達した。農業、漁業などのみならず、商工業も発達してきた地域といえる（写真1）。

中流域は、下流域とともに江戸中期より櫨栽培が始まった地域である。おおよそ現在の有田川町西部（旧吉備町・旧金屋町）に当たる。山間部から流れて

きた有田川は、旧金屋町付近で平野に出る。平地が広がり、江戸時代よりみかん栽培が広まり、昭和初期まで上流域からの産物を集積する地域としてもにぎわった（写真2）。現在では、ＪＲきのくに線とともに高速道路が通過して、郊外型店舗なども展開している。

本稿で対象とする旧清水町は、有田川の上流域から中流域にかけての地域である。古代・中世には、阿弖川荘が成立した。高野山がこの地の領有を主張して、下流域に拠点をおく湯浅氏などと荘園支配をめぐって競合した。近世には紀伊藩領となり、山保田荘に属

地図１　有田川流域（国土地理院「電子国土」をもとに作図）

写真１　有田市新堂を流れる有田川（2019 年８月13 日撮影）

写真２　旧金屋町金屋を流れる有田川（2022 年７月21 日撮影）

した。ただし、旧清水町の最下流に位置する粟生は近世には石垣荘であった。旧清水町域は、政治的には高野山領であった時代は長くはないが、文化的には高野山とのつながりは大きい。また、長峰山脈を越えて北隣の紀美野町域とのつながりも深かった。紀美野町を通過し、さらに海南市方面へ山の産物（棕櫚・山椒など）を出荷する流通ルートも重要であった。有田川中下流域とのつながりも存在したが（木材など）、とくに清水周辺（八幡村）の場合は、地理的な関係で現在の紀美野町方面とのつながりは大きかった。後述するように、昭和中期以降には旧清水町の櫨は有田川中流域の旧金屋町の製蝋所と、長峰山脈を越えて海南市の製蝋所へと出荷されていた。おそらく、木材などの重量の重い物は河川を通じて有田川中下流域へと搬出し、棕櫚・山椒・櫨などの比較的軽い物は車がない時代からでも山を越えて紀美野町・海南市方面へと出荷されていたと思われる。

なお、花園村は有田川上流域であるが伊都郡に属する。高野山の南麓という地理的な条件のために歴史的に高野山とのつながりが深く、中世・近世を通じて高野山領であった。

明治以降、旧清水町域には岩倉村・五村・城山村・八幡村・安諦村が存在した。昭和三〇年（一九五五）に、城山村・八幡村・安諦村が合併して清水町が成立した。昭和三四年（一九五九）に、五村と岩倉村の一部（粟生）が清水町に合併した。平成一八年（二〇〇六）には、吉備町・金屋町・清水町が合併して有田川町が成立した。なお、花園村は紀ノ川流域のかつらぎ町と合併した。

本稿で対象とする旧清水町域について、有田川の上流域、中流域のいずれの呼称を使用するかは文献によっても異なり、地域住民にとってもまとまった意見はないようである。花園村および、旧清水町域の安諦村については上流域と呼ぶことに異論がないようである。ただし、旧清水町の場合は、全体を上流域と呼ぶ場合もあるが〔清水町誌編さん委員会　一九九五〕、岩倉村・五村・城山村・八幡村については中流域と呼ぶ場合もある〔和歌山県立博物館　二〇一七〕。したがって、本稿ではややあいまいな表現であるが上中流域と称しておくことにする。地域の方々の語りによると、「清水から奥」、「粟生から下」というような言い方をする場合が多い。清水から上流、粟生から下流は文化が異なる、という意味である。清水は八幡村の中心地であり、清水町の中心でもあった。山間部でありながら平地が開けている（写真3）。清水より上流は気温も低くなるため、植生や産物も異なる。一方、粟生は岩倉村の東端で、清水町では清水に次いで二番目に人口が多い集落であった（写真4）。岩倉村は、粟生のみが清水町に合併し、その他の四つの集落は金屋町に合併した。昭和時代に分村したことでもわかるように、清水町のうちでは粟生まではより上流域とのつながりが深く、その他の集落はより中流域とのつながりが深かった。粟生より下流になると川の両側に迫る山の標高も次第に低くなる。以上のように、清水から粟生の範囲は、有田川の上流域と中流域の中間地帯と捉えることができる。したがって、ややあいまいな表現ではあるが、本稿では上中流域と称しておくことにした。

写真３　清水を流れる有田川（2018 年 8 月 31 日撮影）

写真４　粟生を流れる有田川（2022 年 7 月 27 日撮影）

2．五村（北野川）の概要

清水町域に存在した村のうち、五村は明治二二年（一八八九）から昭和三三年（一九五八）まで存在した。旧村名を継承した中原・川合・二沢・北野川・三瀬川で構成していた。役場は中原に設置されていた。中原は粟生から四村川をさかのぼったとき、最初に到達する五村の集落であり、五村の中では谷が広く平地もわずかに広がっている。中原には五郷神社、善福寺が存在している。

中原・川合・二沢・北野川は有田川支流の四村川流域、三瀬川は有田川支流

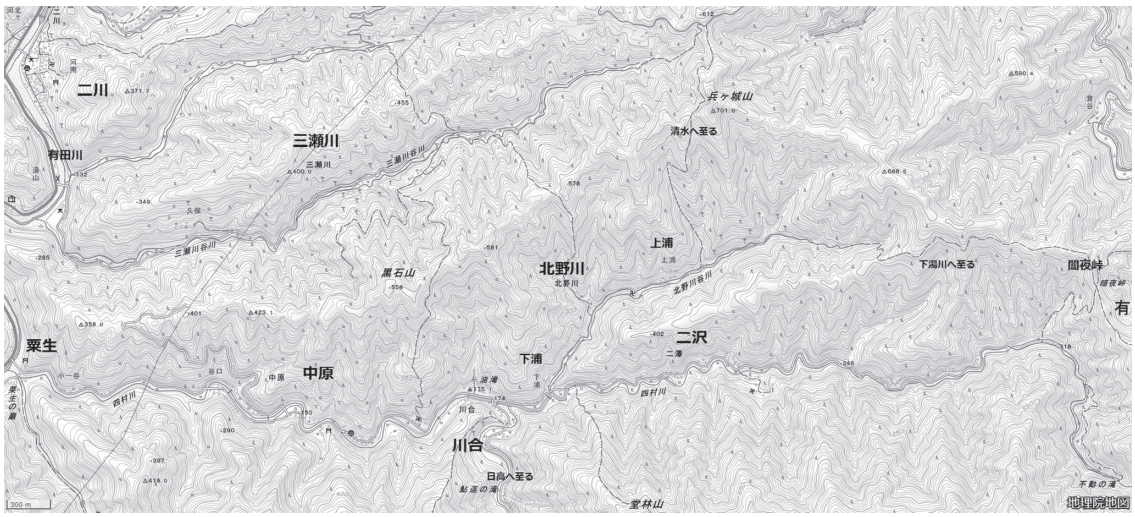
の三瀬谷川流域に位置する（写真5・6・8）。昭和三四年一月一日に清水町に合併した。現在は有田川町清水行政局五郷出張所は、中原と二沢・北野川の中間地点である川合に置かれている（写真7）。厳密にいえば、五村は旧村名であり、現在では有田川町北野川などいう地名表記となっている。五村に相当する地域名として行政的には五郷と称されているが、地域の人々の語りでは五郷という表現をほとんど聞くことがなく、五村と呼んでいることが多い。このため、本稿では地域の方々の表現にしたがって五村と表記しておく。

昭和一三年（一九三八）刊行の『和歌山県特殊産業展望』には、「肉桂の特産地　有田郡五村」という章が立てられており、五村は有田郡で一番人口が少なく戸数二〇〇余り、人口一〇〇〇人とある。そこでは、「天然の資源に恵まれることの尠（すくな）い」とされ、木材の生産が一番多いが、五村の山林の大部分は他村の人の所有であり、木材伐採で入る金額の大部分は他村の人に渡ってしまう、と記されている。五村の唯一の財源として古くから村民に愛育されてきたものとして肉桂があり、なかでも北野川は良品の産地といわれている〔和歌山県統計協会　一九三八〕[1]。

写真５　中原の集落と四村川（五郷神社付近）（2022年８月14日撮影）

写真６　川合を流れる四村川（五郷出張所付近）（2019年12月23日撮影）

五村における生業を一覧にしたものが表1である。表1から五村の生業の特徴は、五村のなかでも集落ごとに生業に差異があったこと、時代とともに変化してきていること、などが分かる。ただし、すべての生業や産物を同じ指標で書き上げているわけではないため、漏れているものも多数あると思われる。とくに、本稿の対象地とし



地図２　五村（国土地理院「電子国土」をもとに作図）

写真７　有田川町清水行政局五郷出張所（川合）
（2022 年 5 月 16 日撮影）

写真８　二沢の集落（2022 年 8 月 14 日撮影）

ている北野川には櫨のほか棕櫚の記載もみられない。これは、明治から昭和中期にかけての産物を書き上げた文献を見いだせなかったことが影響していると思われる。聞き取り調査によると、少なくとも昭和時代には北野川にも櫨や棕櫚が肉桂とともに山に混植されており、産物となっていたことが分かった。

五村のうち、本稿ではとくに北野川を対象として取り上げる。北野川は五村のなかで北東端に位置し、南隣の二沢よりも谷が小さい。天保一〇年（一八三九）刊行の『紀伊続風土記』には、有田郡山保田荘のなかに北野川村の説明があり、以下のように記されている〔仁井田　一九一〇〕。

二沢村の北、川合村の艮十四町にあり、別に一ツの小谷にて二沢・川合の北にあるを以て村名おこる。村二ツに分かれて東にあるを上村といひ、西にあるを下村といふ。

ここに記されているとおり、二沢・川合の北にある小さな谷であるため、北野川という地名になったと思われる。北野川は地形的に東と西で分割されており、東側が上流のために上、西側は下流のために下という呼び方となっている。ただし、現在の聞き取りによると、上村、下村ではなく、上浦、下浦と呼んでいる（写真９・10・11）。北野川は南側の二沢よりも谷が小さいため、昭和中期には五村の中で戸数は最も少なかった。『清水町誌』上巻に掲載されている昭和四五年（一九七〇）の戸数は、中原が五八、川合が四二、二沢が五三、北野川が二九、三瀬川が三八となっている〔清水町誌編さん委員会　一九九五〕。北野川の中では、谷の入り口の下浦のほうが人家は多く、上浦は川沿いを中心に

表１　五村の生業

出典／集落名	寺社改書上帳（堀江家文書）享保 10 年(1725)10 月	山保田続風土記 文化 7 年（1810）	角川地名辞典（地名編）昭和 60 年（1985）	角川地名辞典（地誌編）昭和 60 年（1985）	清水町誌上 平成 7 年（1995）
中原	茶、楮、桑、柿	鮎、楮、漆汁、葛粉、茶、蕨粉、櫨実、串柿、かたくり、狗脊	養鶏、椎茸、柑橘、棕櫚加工、山林業	山林、柑橘園、水田、養鶏、椎茸	椎茸、柑橘、養鶏、縫製
川合	茶、紙木	葛粉、蕨粉、蕨縄、茶、紙木、串柿、狗脊	山林業	林業	山林労務の基地的役割（戦時中まで）
二沢	茶、紙、桑	葛粉、蕨粉、蕨縄、茶、楮、串柿、狗脊、樵木	山林業、棕櫚加工、椎茸、柑橘類、養殖鰻、山椒、ワサビ		林業、椎茸、山葵、山椒、アメノウオの養魚場
北野川	茶、紙木	楮、狗脊、漆、葛粉、烏頭、茶、串柿	椎茸、山椒、山林業、オガライト	山林業、椎茸、ワサビ	肉桂（昔）椎茸、山椒
三瀬川	茶、紙、桑	竹火縄、竹、茶、紙木、串柿	養鶏、山椒、柑橘類、山林業	椎茸、山椒、柑橘類、稲作	竹、楮、串柿、肉桂、瓦製造（昔）、山椒、養鶏

人家が点在していた。聞き取りによると、昭和四〇年前後には下浦には一五・六軒、上浦は八軒であったという。

本稿の主要な話者である上野保二氏（昭和六年生まれ）、岩橋よし子氏（昭和七年生まれ）、前康博氏（昭和三〇年生まれ）はいずれも北野川の上浦の方である。[2] 現状では北野川の一番奥の川沿いに岩橋氏の家がある。岩橋氏の家の裏から西に向かって山を上がると、上野氏の家がある。前氏の家は、以前は岩橋氏の家の対岸（田の跡の上あたり）にあったというが、岩橋氏の家よりも上流に移転し、さらに昭和二八年（一九五三）の水害で現在地（上浦の手前の川沿い）に移転した。なお、本文中にしばしば登場する田中という家（二軒）は、岩橋氏と前氏の家の間の川沿いにあり、上野氏の家の直下に位置する。上野氏の家に至る道は平成三〇年（二〇一八）の台風で崩壊したため、その後は田中家の裏から細く曲がりくねった道を登らざるをえなくなっている。

写真９　北野川の下浦（2022 年７月 27 日撮影）

上浦は現在では、北野川の谷の奥に位置し、車道も上浦で行き止まりとなっている。ただし、現地での聞き取りによると、昭和中期までは上浦から北へ山を越えるルートは、清水に至る主要な道であったという。清水は旧清水町の中心集落であり、上浦からは山を越えた北隣に位置していた。上浦の人は山を越えて清水の医者に行くこともあった。上浦からは和紙の原料である楮や三椏の皮を清水へ背負って売りに行くこともあった。前康博氏の父親は、楮や三椏の皮を一日に清水まで二往復して運んだという。また、日高郡から魚屋が上浦の道を通って清水へ塩サバを運んでいたという。また、北野川の東に位置する下湯川とも往来があった。北野川の谷の最も奥から東へ山を上がり、尾根を通ると闇夜峠に到る。闇夜峠は二沢の奥から上がったところになる。下湯川とは、この峠を越えて五村全体との行き来が多かった。とくに北野川や二沢では下湯川とは嫁の行き来も多く、親戚関係も多いという。

写真 10　北野川の上浦（2022 年５月 16 日撮影）

五章で触れるが、聞き取りによると、昭和中期までは上浦の南向きの山（北斜面）には、頂上付近まで山田が耕作され、棕櫚山が点在し、その中に櫨・肉桂などを植えていた。川沿いにも水田が広がっていた。昭和中期以降には水田は耕作されなくなり、水田跡にはスギ・ヒノキが植林された。また、家の周囲にまでスギ・ヒノキを植林していったため、現在では集落全体が成長したスギ・ヒノキに覆われて見通しが悪くなってきている。昭和中期までは集落および周囲の山林は見通しがよく、明るかったという。

写真 11　北野川の上浦（2022 年７月 27 日撮影）

ただし、北野川の上浦の場合、周辺地域よりもスギ・ヒノキの植林は遅かったようである。上浦の人々も、昭和三〇年代以降、水田跡や家の周囲だけでなく、順番に櫨・棕櫚などを伐ってスギ・ヒノキを植林していったが、その速度は家ごとに異なっていた。前氏の家では櫨は昭和三〇年代までに伐採したが、昭和四〇年代後半まで棕櫚の皮剥ぎをしていた。上野氏の場合は、家の周囲の櫨を残して、山の櫨などは伐採してスギ山にしていった。岩橋氏の家の場合、昭和五〇年ごろからスギ・ヒノキを植林していった。このような地域で、櫨の実採取が平成末期まで継続してきたのであった。

二　櫨・木蝋産業の概要

1．全国的な傾向

一般的に櫨と呼ばれている植物には、ウルシ科ウルシ属のハゼノキ（別名リュウキュウハゼ、学名 Rhus succedanea、英名 Japanese wax tree）とヤマハゼ（学名 Toxicodendron sylvestre）がある。ヤマハゼは古くから日本に自生していたと考えられているが、ハゼノキは江戸時代に大陸方面から渡来した。[3] ハゼノキの果実の中果皮（果実の核と表皮の間）に含まれる蝋を搾って、和蝋燭の原料や鬢付け油などとして利用することで、一大産業として発展した。ハゼノキは、結実量、中果皮の割合、含蝋率で採蝋に最適であるという〔中岡　二〇〇三〕。

櫨・木蝋産業については、産業が発達していた各地域で研究はみられるものの、全体像をまとめた文献は限られている。ここでは愛媛県内子町でまとめられた『ハゼノキ今昔物語』に記された時代区分を用いて櫨・木蝋産業の歴史を提示しておく。江戸時代以前は「萌芽準備期」であり、山野に自生するヤマハゼ、ウルシなどから採蝋していた。江戸時代は「確立発展期」で、外来種としてのリュウキュウハゼの移入が始まり、西日本各地にその苗木や種子が伝播され、製蝋技術が確立していった。江戸中期以降は、各藩の財政・産業政策にも支えられて発展した。明治時代は「発展継続期」といわれる。明治初期、藩の後ろ盾を失ったことや、国内需要の急減などにより、櫨・木蝋産業は一時的に衰退したが、明治中期以降には輸出増大や新需要開拓などによって発展した。その後、大正～昭和初期は「後退～漸微回復期」、大戦前後は「決定的後退期」、昭和四〇年代以降は「衰退のなかでの見直し」、と位置付けられている〔内子町町並保存対策課・内子町産業振興課　一九九三〕。

大正以降の変遷を他の文献をもとに補足すると以下のようになる。大正後期には電灯の普及などにより半減し、昭和初期まで減少傾向をたどる。昭和一〇年ごろには、政府の奨励、輸出の増大などで再び伸び、福岡・佐賀・長崎・熊本・愛媛・和歌山などの県で盛んに栽培された。戦時中、食料増産による乱伐と、植栽中断により戦後は半減した。物資事情の悪化などで再び盛んになる気配があったが、昭和二〇年代後半からパラフィンなどの代替品の出現により衰退し、昭和四〇年代には櫨の実の年生産量は一〇〇〇トン以下となった。しかし、天然油脂中、最も高い融点を有し、二塩基性酸の含有率などによる粘靭性などの特質をもっていることや、自然品の見直し気運などから徐々に需要が回復してきているという〔中島　一九八〇〕。

2．有田郡を中心にした和歌山県における櫨・木蝋産業の変遷

a　江戸時代

紀州（現在の和歌山県）にハゼノキが伝来したのは江戸中期であった。それ以降、急速に櫨の栽培が広がり、櫨実から蝋を取る木蝋業、および木蝋を利用した蝋燭製造業が発展した。全国的にいえば、櫨実・木蝋は九州・瀬戸内地

域、蝋燭は大坂・京都・北陸地域と分業体制が成立していたが、紀州の木蝋業は、原料（櫨実）、木蝋、蝋燭生産まで全工程にわたって生産する全国でも数少ない例であるという〔古島　一九六一、上川　一九七八〕。

江戸時代の紀州における櫨・木蝋・蝋燭業の動向については、笠原正夫によって明らかにされている〔笠原　一九七三〕。以下、先行研究をもとに有田郡を中心にした概要を示しておく。

江戸中期、紀州藩では砂糖製造計画があり、原料である甘蔗苗を移植するため、廻船業を営んでいた有田郡箕島村（現在の有田市）の田中善吉が、元文元年（一七三六）に薩摩に派遣された。善吉は薩摩において、甘蔗苗を入手し、製糖法を学んだのみならず、櫨実に関心をもち、櫨の栽培方法や製蝋方法も学んだ。翌元文二年（一七三七）三月、善吉は薩摩より甘蔗苗や櫨実を携えて紀州に戻った。善吉が紀州に持ち帰った櫨実がハゼノキ（リュウキュウハゼ）であったと考えられる（写真12）。当時の文献には「唐櫨」などと記されている〔高垣　一九三四〕。紀州では、元禄四年（一六九一）に有田郡井関村で生蝋を大坂方面から買い入れ、蝋燭の製造を始めたのが紀州蝋燭の始まりといわれている。善吉は蝋燭についての予備知識があったため、櫨実や製蝋に関心をもったと思われる。有田地方は、紀州における櫨栽培の始まりの地であった。

写真12　有田市箕島の田中神社（2022年5月2日撮影）

善吉は持ち帰った櫨実を有田郡北湊村に蒔いて櫨樹栽培を開始しながら、藩に対して殖産政策として櫨栽培を実施するよう提案した。藩より殖産担当の役人として任命された善吉は、五二歳であった延享二年（一七四五）から明和四年（一七六七）七四歳で没するまでの二二年間、櫨栽培の普及に力を尽くした。延享二年、善吉は有田郡小豆島村のほか、一九か村に「唐櫨実」を配布している。この一九か村は宮崎荘・保田荘・糸我荘・田殿荘・石垣荘・藤並荘・宮原荘の村々であった〔高垣　一九三四〕。この範囲は、現在の行政区画でいえば、有田市と有田川町のうち旧吉備町になる。したがってこの時点では、旧金屋町・旧清水町地域には櫨実は配布されていないことが分かる。

有田郡の櫨栽培の普及状況は、宝暦二年（一七五二）の記録も残っている。このとき、有田郡では八五か村で一七万八千九九本の「唐櫨」が植え付けられている。宮崎荘・保田荘・宮原荘・糸我荘・湯浅荘・広荘・藤並荘・田殿荘・石垣荘に広がっている〔高垣　一九三四〕。この範囲は、現在の行政区画でいえば、有田市、有田川町のうち旧吉備町・旧金屋町、湯浅町・広川町になる。延享二年の段階よりも広範囲に櫨が植え付けられていることが分かる。しかしながら、旧清水町域の村名はあがっておらず、有田川の中下流域に限られていたようである。なお、同じく宝暦二年には海士郡・日高郡へも櫨が植え付けられている。海士郡・日高郡を含めていずれも沿岸部から河川の中流域にあたり、この段階では櫨栽培は山間部の村まで広がっていなかったといえる。その後、海士郡・有田郡・日高郡の平野部から開始した櫨栽培は、次第に藩内各地に広がっていった。年代は不明であるが、有田川流域においても、次第に中上流域の山間部へと櫨の植栽が広まっていったと思われる。

一方、櫨実を搾って蝋を製造する製蝋業を営む者が出てきた。一八世紀後半

に製蝋の営業願いを出しているのは、現在の和歌山市、海南市、有田市にあたる地域の人びとであった。有田郡では宝暦六年（一七五六）に、宮原組南村（現在の有田市）の農民から願書が出ている。

一八世紀末になると、藩内での櫨栽培が広がり、製蝋業も急激に増加していた。また、木蝋を利用した蝋燭製造業も発展し、江戸や関東一円に紀州蝋燭の販売網が形成されていた。一九世紀になると、紀州では三郡（海士・有田・日高）蝋燭仲間が結成された。有田郡の場合、天保七年（一八三六）には蝋燭仲間は一一軒で、三郡のなかで最も数が多かった。ところが、文久元年（一八六一）には、海士郡が二六、有田郡が一〇、日高郡が一六となっており、海士郡の蝋燭商人が急成長している。たとえば、海士郡鰈川村（現在の海南市下津町）の蝋燭仲間の場合、自家でも製蝋をおこなうが、下請けの製蝋業者に櫨実や蝋の半製品を売り、蝋燭の完成品として戻してもらい、他国へ蝋燭を販売していた。このように江戸末期には、紀州の櫨・木蝋・蝋燭業は一大産業となっていた。文政八年（一八一五）成立の『十寸穂（ますほ）の薄（すすき）』には、有田郡の産物として「黄櫨（はぜ）」、「湯浅蝋燭」があげられており〔堀内　一九三二〕、有田郡においても櫨栽培のみならず木蝋・蝋燭製造もおこなわれていたことが分かる。

なお、江戸末期になると、ハゼノキの普及が進み、自生していたヤマハゼとの交配もあって、実が葡萄のように大きな葡萄櫨が出現した。葡萄櫨は、現在の紀美野町志賀野地区の山中で、天保年間（一八三〇～四四）ごろに見いだされた。葡萄櫨は製蝋の収量が櫨（ハゼノキ）よりも多いため接ぎ木によって増殖が図られた〔和歌山県内務部　一八九三、日下部　一九三三〕。

b　明治時代

先述したように木蝋業を全国的にみると、明治時代は発展継続期といわれている。県全体の木蝋産業の動向としては、明治初期には粗悪濫造により一時的に衰退した。その後、明治中後期に和蝋燭、鬢付け油の需要低下で櫨・木蝋産業全体が縮小したものの、輸出により産業は継続した。

明治時代の和歌山県における木蝋業の動向については、上川芳実によって明らかにされている〔上川　一九七八〕。上川は、明治六年（一八七三）の府県物産表を用いて明治六年時点での生産状況を分析している。櫨実は愛媛県と北九州地域が圧倒的に多く、山陰や紀伊半島がそれに次いでいる。木蝋生産でも同じような傾向を示すが、福岡（筑前・筑後・豊前）・愛媛・山口・和歌山・大阪の諸府県で大部分を占める。蝋燭生産については、漆蝋による蝋燭生産であった東北・北陸をのぞくと、京都・大阪・和歌山が大産地となっている。明治二〇年以降になると、福岡・愛媛両県で全国の木蝋生産の六割を占め、和歌山県の生産量の割合は低下している。

また、上川は『和歌山県勧業年報』を用いて、県内の生産動向を分析している。櫨実生産については、明治一三年（一八八〇）には有田郡が二三万五〇〇〇貫と圧倒的に多かったが、明治三〇年（一八九七）には有田郡が二三万七〇〇〇貫、海草郡（海士・名草両郡が合併して成立した）が二四万四〇〇〇貫と並んでいる。生蝋生産では、明治二〇年代前半までは有田郡の比重が大きかったが、明治後期には海草郡が主産地となっている。

江戸末期に現在の紀美野町で発見された葡萄櫨は、明治時代には有田郡でも栽培が開始されている。また、和歌山県のみならず、九州にも接ぎ木によって増殖されていった〔和歌山県内務部　一八九三、日下部　一九三三〕。

c　大正・昭和初期

大正以降については和歌山県における櫨・木蝋産業の歴史学的な研究はほぼ

みられない。大正から昭和初期にかけては、全国的に大日本山林会や櫨栽培地の都道府県山林会が中心となり、特種樹種（現在の特用林産物）を農家の副業として栽培を奨励する動きが広まっていた。和歌山県においても櫨栽培が奨励されている。このような経緯については、当時の文献を収集している段階であるため、別稿で考察することを予定している。

d　昭和中期以降

昭和中期以降は、和歌山県における櫨・木蝋産業はさらに記述した文献は少なくなる。『清水町誌　下巻』には、和蝋もパラフィンに押されて、昭和四〇年代には櫨の需要が消えた、と書かれている〔清水町誌編さん委員会　一九九八〕。しかし、昭和中期以降も和歌山市、紀美野町、有田川町において櫨栽培は継続し、海南市、有田川町において製蝋所が営業していた。

有田川町では、平成初期まで旧金屋町中井原の東家が製蝋をおこなっていたが、その後は県内での製蝋は海南市の吉田製蝋所のみとなった。櫨栽培地、栽培農家も急速に減少してきた。平成後期になると、栽培農家は和歌山市南部、紀美野町西部（七良浴正氏）、有田川町中部（上野保二氏）のそれぞれ一軒程度となった。

三　旧清水町の櫨・木蝋の歴史と民俗

1．歴史学的な文献

旧清水町の櫨栽培については、『清水町誌』などに記述がみられる。まとまった文献は見当たらないが、断片的な資料をもとに概要をまとめておく。

延享二年（一七四五）に田中善吉が「唐櫨」（ハゼノキ）の実を配布した有田郡の一九か村は有田川中下流域の村々であり、旧清水町域には配布されていない。つまり、江戸中期に田中善吉が櫨の栽培を広めた段階では、中上流域にすぐには広まっていなかった。その後、文化七年（一八一〇）の『山保田続風土記』には、中原村の産物として「櫨実」があがっている〔清水町誌編さん委員会　一九八二〕。江戸後期には旧清水町域にも次第に櫨の栽培が広がりつつあったと思われる。ただし、『清水町誌　史料編』所収部分の『山保田続風土記』を見る限り、他村で櫨実が産物になっていたところはない。

明治時代になると、旧清水町域にも製蝋所が複数存在していた。明治二九年（一八九六）の県内の製蝋業者の一覧によると、岩倉村・五村・城山村に製蝋業者が存在している。ただし、有田郡全体では二五軒の製蝋業者があがっているが、上流流域に位置する岩倉村・五村・城山村の製蝋業者はこのうち五軒にすぎず、大半は中下流域に存在していた。岩倉村では中西清七・中上兵助・中庄之助、五村では山中伊兵衛、城山村では早田常蔵の名前があがっている〔上川　一九七八〕。製蝋所の分布から考えると、明治初期には岩倉村・五村・城山村にも櫨栽培が広がっていたと考えられる。

『清水町誌　上巻』には、第四編「近世」第二章「紀州徳川藩制」第五節「産業」に「櫨」の項目があがっている〔清水町誌編さん委員会　一九九五〕。おそらく、江戸末期から明治初期ごろのこととして、「有田郡では河口部から有田川上流奥地まで植栽されていた」「この「浮き銭」の木が、当時は山保田組の里近くの山々を覆っていた」と書かれている。ただし、具体的な時期や栽培地域などの情報は書かれていない。また、同誌には「第五節　産業」「産物」の項目に、「放任栽培に近い形で、棕櫚・山椒・櫨・肉桂・楮などの浮銭稼ぎの作物があったが、産物としては棕櫚以外は大きなものではなかった」とも記されている。

『清水町誌　下巻』には、「第五編　近現代」「第二章　産業」「第六節

林業」に「櫨」の項目があがっている〔清水町誌編さん委員会　一九九八〕。「樹体が大きいので、堤外地や山際、棕櫚との混植など行われ、棕櫚同様、年間の肥培管理が楽なので、いわゆる「浮銭」稼ぎに貴重なものであった」と記述されている。具体的な地名や年代などの説明がないが、後述する筆者の聞き取り調査から見えてきた櫨栽培の様子をよく表している文章といえよう。

明治四年（一八七一）五月一八日の暴風雨に際して、安諦村の大庄屋堀江亀太郎が書き上げた破損取り調べには、「櫨木」という項目がある〔高野　一九三六〕。上流域の安諦村地域には、後述するように昭和初期には産物として櫨はみられなくなっているが、江戸末期から明治初期にはこの地域でも櫨が産物として取り扱われていた可能性がある。

明治末期には、粟生の今井嘉が支那櫨と支那油桐の栽培を普及させようとしていた。明治三五年（一九〇二）、中国の武昌農務学室に勤務していた今井の友人・吉岡栄治郎を通じて、日本で栽培できる中国に特有の山産物の移入を依頼し、支那櫨樹、支那油桐の種子を五梱包ずつ送付してもらい、これらの栽培を広く普及した。今井は岩倉村の村長、有田郡会議員、和歌山県議会議員などを歴任し、地域の産業振興にも尽力し、棕櫚の葉による今井式蚕網の開発と普及、棕櫚晒葉による夏帽子の再開発と普及、にも貢献した人物であった〔新谷一九九七〕。ただし、粟生の大田氏などへの聞き取りによると、油桐はある程度栽培が広まったが、支那櫨の栽培は広まらなかったようである。

その後、昭和八年（一九三三）に城山西尋常高等小学校が編纂した『教育の基礎としての郷土研究』には、「第三章　産業」「第四節　林業」「四　其の他の林産物」のなかに以下のような櫨の記述がある〔三角　一九三三〕。

櫨、五倍子、楮等の生産あれども洋蝋化学染法洋紙の隆盛に反してその原料たる櫨、五倍子、楮等の栽培も次第に下火となり昔日の観なし。

また、昭和七年の城山村の櫨の収量は一七〇〇貫、価格は一七〇円で、林野産物一〇品目のうち、棕櫚新葉、白炭、薪炭材、棕櫚皮、黒炭、楮、杉材、五倍子に次いで九番目の価格であった。これによると、昭和初期にはすでに城山村では産業としては衰退していたと思われる。

なお、安諦村においては、昭和一〇年度の物産や主要移出入物資、昭和一一年度の特殊樹木の奨励計画などに、櫨の項目はまったくみられない〔高野　一九三六〕。

『清水町誌　下巻』によると、昭和二〇年八月、「生活必要資材トシテノ木蝋原料タル櫨実ハ終戦後ト雖モソノ重要度ヲ加重スル」ためとして、各村に割り当てがおこなわれている。五村には四六七〇〇貫が割り当てられている〔清水町誌編さん委員会　一九九八〕。これは、周辺地域と比べて最も多い収量になっている。

また、先述したように、『清水町誌　下巻』には、和蝋もパラフィンに押されて、昭和四〇年代には櫨の需要が消えたと書かれているが〔清水町誌編さん委員会　一九九八〕、実際には清水町における櫨栽培は消えていなかったことが今回の調査で判明した。

2．民俗学的な文献

旧清水町内では民俗調査報告がいくつかみられる。しかし、生業として櫨のことを報告した民俗的な文献はわずかである。

昭和四〇年（一九六五）刊行の『和歌山県民俗資料緊急調査報告書』には、

現在の有田川町域で、清水町杉野原・同町清水・同町粟生・金屋町石垣の調査報告が掲載されている。このうち、櫨に関する記述があるのは、清水町粟生のみである。「昔日は黄櫨の実（ろうそくの原料）の産地であった」が、まったくすたれてしまった、と書かれている。また、生産暦として、「はぜとり」は旧九月中旬から旧一〇月であると記述がある〔和歌山県教育委員会社会教育課一九六五〕。

なお、近畿民俗学会では昭和四八年（一九七三）に清水町の民俗調査をおこなっており、生業関係では山椒や楮・保田紙のことなどが記述されているが、櫨のことは触れられていない〔近畿民俗学会　一九七六〕。

その後、地元で発行されていた『清水町文化』には、日物川の井本吟太郎（明治三〇年生まれ）に聞き取りをした報告が掲載されている。そのなかに、櫨に関する語りがある。これは、櫨栽培の民俗について具体的な内容を記したほぼ唯一の記録といえる貴重なものであるため、櫨に関する部分をすべて引用する〔二沢　一九八一〕。

櫨はこの辺が産地やったけど、一番多かったのは五村で、三瀬川も多かった。それでも日物川全体で千貫から二千貫位はあったと思う。わしとこだけで、五～六〇貫位取ったから……。ほとんどの家が木を持っていて、この辺の見えけ（ママ）には（筆者注：見えている辺りという意味か）ずっと櫨の木があった。十二月頃に葉が落ちてから実をとった。「ぶどうはぜ」が値が高く、「こはぜ」はそれの半値位……。

昭和七～八年頃、県の奨励で「昭和福」を百本位植えた。昭和福は、ぶどうはぜより、ロウがたくさんとれる……。

櫨の実はほとんど金屋へ出た。金屋の中野に櫨の製造所があり、そこから買いに来たさけ……。正月前にはほとんど売ってしもた。子供の時から実とりをしたけど恐しかった。高いさけ……。櫨の実は一貫いくらの請負いで賃取り……。

話者の井本吟太郎は、旧城山村の村会議員、農協の役員、清水町議会議員、みかんの出荷組合長などを歴任し、地域の特産物の開発に尽力していた人物であった。井本の語りからは、大正から昭和初期における日物川での櫨栽培の様子が分かる。昭和初期に優良品種の櫨の栽培が奨励されたことも語られている。先述のように、昭和初期には城山村の産業としては衰退していたが、地域全体としては櫨が依然として多く存在して、農家の生業として存続し、副収入としての役割があったことが分かる。なお、昭和福櫨とは、長崎県島原の原産で、昭和二年に命名されており、昭和初期には「櫨増殖奨励の目標値」とされていた櫨である〔正木　一九三八〕。

本章で紹介してきた文献をもとにして、旧清水町における櫨栽培の歴史をまとめると以下のようになる。江戸中期には広がっておらず、江戸後期から明治初期に広がった。昭和初期には五村が多かった。昭和初期に栽培奨励されることがあった。町内の櫨栽培としては昭和初期から中期に衰退した。ただし、実際には上野氏は平成末期まで継続してきた。

四　櫨栽培技術継承の動きと歴史民俗学的調査

1．櫨栽培技術継承の経緯

筆者は、和歌山県林業試験場・和歌山県農林水産部（海草振興局林務課・有田振興局林務課）・Team ZENKICHI（チームゼンキチ）、りら創造芸術高等学校

（紀美野町）、吉田製蝋所（海南市）など、関係者から櫨・木蝋産業の再産業化に向けた取り組みの経緯をうかがい、情報提供を受けてきた。かつて産業であったものが衰退して細々と継承され、再び産業として復活を目指すという大変興味深い動きが進行しているのである。こうした現在の動き自体を記録しておくことも重要である。櫨栽培技術継承の点を中心に経緯をまとめておきたい。

葡萄櫨栽培を継承しようとする有田市の脇村正次氏（Team ZENKICHI 主宰）によると、平成二一年（二〇〇九）ごろに櫨が不作の年があり、このときに京都の和蝋燭屋などから、有田産の櫨蝋（木蝋）を渇望する声が出るようになったという。[4] 吉田製蝋所によると、葡萄櫨の木蝋は他の櫨で製造した木蝋よりも融点が高いため、蝋燭の上掛け塗りに使用している。有機溶剤の化学薬品（ヘキサン）を使用せずに伝統的な「玉締め搾り」で葡萄櫨のみを原料として製造する木蝋は全国的に限られているため、吉田製蝋所で製造する木蝋は和蝋燭屋で重宝されているという。[5] また、京都のアロマテラピーコンサルタントなども化粧品やアロマテラピーの原料として葡萄櫨に関心がもつようになった。

平成二九年（二〇一七）九月には、りら創造芸術高等学校の生徒たちが枯死したと思われていた葡萄櫨の原木を紀美野町内で発見し、マスコミにも取り上げられた。林業試験場特用林産部部長の坂口和昭氏によると、このころから葡萄櫨・木蝋産業復活に向けた動きが活発になっていったという。葡萄櫨の接ぎ木による増殖計画を立て、平成三〇年（二〇一八）四月より葡萄櫨の接ぎ木試験を開始した。有田市の脇村氏だけでなく、林業試験場、紀美野町志賀野地区のさみどり会なども接ぎ木をおこなうが失敗した。[6] その後、吉田製蝋所に葡萄櫨を納めていた仲買人の砂子和寛氏から、「有田川町の上野保二さんは三〇～四〇年前までは接ぎ木の指導もおこなっていたらしい。県内で最後の接ぎ木技術の保持者かもしれない」という情報を得て、脇村氏が音頭を取って接ぎ木の研修会を開催した。坂口氏によると、上野氏は八七歳（当時）で近々、生産から引退するということで、急遽、研修会をおこなうことになったという。

このようにして、平成三〇年八月三一日、有田川町北野川の上野氏の自宅に台木を運び上げ、上野氏より伝統的接ぎ木技術の実演がおこなわれた。これは脇村氏が企画して、紀州有田商工会議所が後押しをし、和歌山県林業試験場特用林産部の協力のもとで実現したものであった。その際、林業試験場が写真・動画で記録している（写真13～21）。同年一一月二六日には、葡萄櫨の実の収穫技術研修会を実施し、脇村氏や県の関係者などが上野氏より葡萄櫨の収穫方法について指導を受けた（写真22～24）。なお、林業試験場の坂口氏によると、研修会当日、上野氏は平地では腰が曲がり杖を突いて歩いていたが、木に登ると背筋が伸び、枝から枝へ身軽に移動し、櫨の実を次々と採っていき、現場にいた人々を驚かせたという。しかしながら、高齢のため上野氏は同年に櫨栽培から引退した。

写真 13　伝統的接ぎ木技術の伝授（2018 年 8 月 31 日撮影、和歌山県林業試験場提供）

写真 14　写真 13 に同じ

写真 19　写真 13 に同じ

写真 15　写真 13 に同じ

写真 20　写真 13 に同じ

写真 16　写真 13 に同じ

写真 21　写真 13 に同じ

写真 17　写真 13 に同じ

写真 22　葡萄櫨の実の収穫技術研修会（2018 年 11 月 10 日撮影、和歌山県林業試験場提供）

写真 18　写真 13 に同じ

葡萄櫨の接ぎ木技術や採取技術の研修会は、上野氏が引退する直前に企画・実施され、技術の継承がおこなわれたことになる。

なお、令和元年（二〇一九）五月三〇日には、日本特用林産振興会より、全国で二三名の特用林産功労者が表彰された。そのなかに葡萄櫨栽培をおこなってきた上野氏が入り、特用林産功労者特別賞として葡萄櫨の原木調査を実施したりら創造芸術高等学校が選ばれた。

令和元年四月には脇村氏を中心に Team ZENKICHI が結成され、同年九月九日には、有田振興局および有田市初島の葡萄櫨栽培地において、県庁林業振興課と県林業試験場の共催で、「第一回ブドウハゼ産業化情報交換会・接ぎ木研修会」が実施された。同年一二月二三日には、有田振興局農林水産振興部林務課主催で、有田川町清水行政局五郷出張所および上野氏の自宅周辺にて「ブドウハゼ研修会」が開催された（写真25～28）。このときは、五郷出張所におい

写真 23　写真 22 に同じ

写真 24　写真 22 に同じ

写真 27　写真 25 の会での上野氏の葡萄櫨見学（2019 年 12 月 23 日撮影）

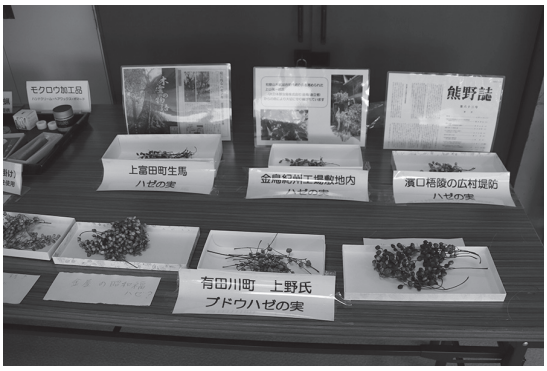


写真 25　有田振興局農林水産振興部林務課主催の「ブドウハゼ研修会」の会場で展示された櫨の実（2019 年 12 月 23 日撮影）

写真 28　写真 25 の会での Team ZENKICHI の中西宣博氏による葡萄櫨収穫指導（2019 年 12 月 23 日撮影）

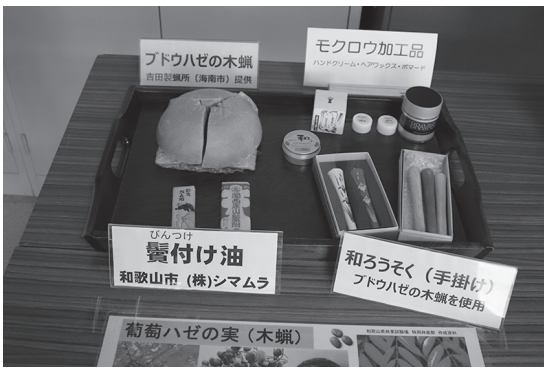


写真 26　写真 25 の会場で展示された木蝋製品（2019 年 12 月 23 日撮影）

て、御前明良氏（有田市文化財保護審議委員）より「ハゼ栽培及び木蝋産業の歴史について」、仲里長浩氏（有田中央高等学校教諭）より「ブドウハゼの植物学的な魅力について」という講演があったあと、北野川の上野氏の葡萄櫨を見学し、和歌山県林業試験場の説明、Team ZENKICHI による葡萄櫨収穫実演などをおこない、参加者による意見交換がおこなわれた。このときは筆者も参加した。

令和二年（二〇二〇）一月二九日には、県庁林業振興課と県林業試験場の共催で、和歌山市東部コミュニティーセンターおよび和歌山市坂田の葡萄櫨栽培地にて「第二回ブドウハゼ産業化情報交換会・接ぎ木研修会」が実施された。その後、令和三年（二〇二一）一月二六日に和歌山市東部コミュニティーセンターにて「第三回ブドウハゼ産業化情報交換会・接ぎ木研修会」も予定されていたが、新型コロナ感染症の拡大により延期されたままとなっている。

このような経緯をたどり、葡萄櫨の接ぎ木による増殖計画は進み始めている。上野氏からの接ぎ木技術の伝授が大きな役割を果たしている。Team ZENKICHI では平成三〇年に上野氏より葡萄櫨の接ぎ木技術を伝授されたあと、次々と接ぎ木を成功させている。令和四年五月現在、有田市にある脇村氏の畑には四六本の葡萄櫨がある。上野氏のように高い木に登らないでも実が採れるように、ロープで枝を引っ張り、低木仕立てにしようと試みている

写真 29　脇村氏の葡萄櫨（2022 年 5 月 2 日撮影）

（写真29）。収穫量も二年目、三年目と着実に増えているという。令和四年（二〇二二）は四年目となる。北野川の上野氏の葡萄櫨については、上野氏引退後は櫨・木蝋産業復活を目指す有志で櫨の実を採取し、吉田製蝋所へ納めているが、上野氏が採取していたほどの収穫量はあげられていないようである。

2．筆者による歴史民俗学的調査の経緯と話者

筆者は、科学研究費補助金基盤研究（C）「紀の川流域における中世荘園の地域環境史的研究」（代表：高木徳郎）において、平成二三年（二〇一一）度～二五年（二〇一三）度にかけて、紀美野町各地において生業調査を実施してきた。なかでも、平成二五年に紀美野町内の複数の地域で櫨のことを聞いた。平成二四年（二〇一二）からは近畿大学文芸学部の民俗学実習を紀美野町で実施し、とくに志賀野地区において現在（当時）でも櫨採りをしている七良浴正氏がいるという情報を得た。そして、平成二六年（二〇一四）九月、りら創造芸術高等学校の鞍教諭（当時）や生徒たちと聞き取りをおこなった。平成二九年（二〇一七）九月には、りら創造芸術高等学校の生徒たちが枯死したと思われていた葡萄櫨の原木を発見し、その成果報告を『民俗文化』三〇号に掲載してもらった〔三木ら　二〇一九〕。筆者も同時に紀美野町で櫨について聞き取りしてきたことを同誌にまとめた〔藤井　二〇一九〕。

その後、筆者の櫨に関する調査は進んでいなかったが、令和元年一二月二三日に有田川町清水行政局五郷出張所および上野氏の櫨畑にて「ブドウハゼ研修会」が実施された際に参加したことで、有田川町の櫨の民俗についても調査を開始することになった。本稿の中心的な部分を占める上野氏からの聞き取り調査については、現在の社会状況のなかで慎重に進めてきた。コロナ禍における民俗調査の記録でもあるため、以下に経緯について記しておく。

令和元年一二月二三日の研修会の終了後に、有田川町内の施設に入っておられる上野氏に面会し、上野氏からの聞き取り調査を依頼した。ところが、その直後、令和二年（二〇二〇）一月から新型コロナ感染症の拡大が始まり、聞き取りは当面自粛せざるをえなくなった。同年の夏にも周辺地域の方や、有田振興局の片岡氏を通じて、何度か面会の機会を探ったが、面会できない状態が続いた。令和三年一月には、上野氏が自宅に戻る際に面会を予定したが、親族の都合で中止となった。その後、再び感染拡大により、訪問できる状況ではなくなった。同年一〇月に緊急事態宣言が解除され、和歌山県の新規感染者が〇人という日も続いたため、親族と施設に電話した。施設側は県外からの面会は依然として断っているということであった。そこで、施設側の了解も得て、電話による聞き取りを実施させていただくことにした。上野氏への電話での聞き取りは令和三（二〇二一）年一〇月二七日・一〇月三〇日・一一月一七日・一二月四日・一二月二二日に三〇分程度ずつ実施した。(7)

上野氏以外の聞き取りは以下のように進めた。令和元（二〇一九）八月三一日に清水の小向晃夫氏（昭和五年生まれ）に聞き取りをしていた。上記の研修会参加後には、仲買人および二川地区の状況を把握するため、令和三年（二〇二一）一一月二二日に、二川の砂子和寛氏（昭和一九年生まれ）・ゆき子氏夫妻、一一月二三日に二川の林口泰治氏（大正一四年生まれ）に聞き取りをした。五村（北野川）周辺の櫨に関する情報を得るため、令和四年（二〇二二）四月二七日に海南市の吉田製蝋所の吉田忠司氏・悦子氏夫妻、五月二日に脇村正次氏、吉田製蝋所を訪問した。有田川町では、五月一六日に北野川出身の前康博氏（昭和三〇年生まれ）、六月九日に粟生の大田貢氏（昭和一三年生まれ）、六月一六日に二沢の東本匡弘氏（昭和一九年生まれ）、楠本の前島義郎氏（昭和一四年生まれ）・鶴田倫雄氏（昭和一三年生まれ）、六月二〇日・二三日に下湯川の大久保家宏氏（昭和一五年生まれ）、六月二三日に下湯川の西脇直次氏、七月一日に中井原の東重太郎氏（元製蝋所）、七月二七日に北野川に居住していた岩橋よし子氏（昭和七年生まれ）と山本洋子氏（岩橋氏の娘）に聞き取りをした。(8)

五　五村（北野川）周辺の櫨の民俗

1．製蝋

有田川上中流域、とくに五村周辺は櫨の栽培地であったが、かつては櫨の実を搾って木蝋を製造する業者も存在していた。三章で述べたように、明治二九年（一八九六）時点では、岩倉村では中西清七・中上兵助・中庄之助、五村では山中伊兵衛、城山村では早田常蔵が製蝋をしていた。ただし、岩倉村の三名については、粟生の大田貢氏に確認しても知らないというため、旧清水町であった粟生以外、つまり旧金屋町地域であった可能性もある。

このうち、五村の山中家については、本章4-hにあるように、上野保二氏も聞いてはいたが、見たことはないという。製蝋をしていたのは昭和初期以前であったようである。二沢の東本匡弘氏は、以下のように語る。

> 山中さんは櫨の実を搾った。中原の人。お宮さん（筆者注：五郷神社）の一〇〇ｍほど下。今でも立派な蔵がある。櫨を搾ったと聞いた。見たことはない。周りはほとんど櫨山だった。五村で一番の山主だった。

東本氏は、昭和一〇年代に飛行機の燃料とするために山中家ではシナギリの油を搾っていたという。

粟生の大田氏は、城山村の早田常蔵は二川の人であるという。また、大田氏

の家でも製蝋していたことがあるという。貢氏の父の兄弟が「櫨搾りして蝋にした人がいる」といい、現在でも大きな石臼が残っている（写真30）。ただし、大田氏は製蝋しているところは見たことがないというため、大田家の製蝋業も昭和初期には終了していた可能性が高い。

このように、旧清水町内では明治・大正時代には数軒の製蝋業者が存在したが、昭和初期以降は製蝋するところはなくなった。その後は、採取した櫨の実は、平成初期まで営業していた旧金屋町の東製蝋所（大国屋）へ出荷するか、上野氏のように仲買人の砂子氏を通じて海南市の吉田製蝋所へ出荷するようになった。

写真30　大田氏の石臼（2022年6月9日撮影）

2．櫨の仲買人

五村周辺では、櫨の実を搾って木蝋を製造する業者と、櫨を栽培して実を採取する農家との仲介をする仲買人の役割も重要であった。仲買人は、栽培者が採取した櫨の実を集荷して、製蝋業者へと届ける存在であった。旧清水町域には、櫨に限らず棕櫚・山椒など、山の産物を集荷する仲買人が多数存在した。旧清水町において、とくに櫨の仲買を専門にしていたのは、二川の砂子不二夫・和寛氏の父子であった。

砂子和寛氏より、五村以外での櫨の仕入れ先として語られたのは以下の通りであった。旧城山村では二川は三軒ほどで、このうち大きなところは二軒あった。東大谷は六軒ほど、境川は六軒ほど、日物川は七軒ほどであった。旧岩倉村では岩野河に一軒あった。

後述するように、砂子氏にとっては五村、とくに北野川の上野氏は重要な仕入れ先であった。砂子氏は、北野川の上野氏の櫨を一手に取り扱うことで、この地域で最後まで櫨の仲買を継続してきたといえる。砂子和寛氏・ゆき子氏夫妻の語りを中心に、砂子氏の櫨仲買の経歴をまとめると以下のようになる。

写真31　二川の集落と有田川（2022年6月20日撮影）

本章3–aで林口氏の語りにあるように、水害までは二川は上流から運ばれる木材を筏に組んで下流へと運ぶ物流の拠点であり、旅館や商店も多い集落であった（写真31）。砂子不二夫（和寛氏の父）は、二川において昭和二〇年代に櫨・棕櫚・材木などの山産物を扱う商売を始めた。不二夫の親は二川の有田川北岸で、筏流しの人たちが泊る旅館をしていた。昭和二八年（一九五三）七月の大水害で有田川の南岸に移って商売を続けた。和寛氏の記憶では、父親が扱っていたのは櫨と棕櫚が半々ぐらいであったという。櫨、棕櫚ともになじみの出荷先があった。櫨は海南市の吉田製蝋所に決まっていたという。当時、旧金屋町にも製蝋所があったため、櫨の仕入れについては値段の競争であったという。なお、砂子不二夫の棕櫚出荷先は野上（現在の紀美野町西部から海南市

東部）であった。砂子家の場合、昭和四〇年代に棕櫚産業が衰退してからも櫨の仲買を継続した。不二夫の息子の和寛氏は、昭和四〇年代以降にバス会社に勤務しながら父親の仕事を手伝い、櫨を周辺地域から集め、海南市の吉田製蝋所へ出荷し続けた。先述したように、上野氏は平成三〇年（二〇一八）に櫨栽培を引退した。この地域では上野氏以外に櫨栽培農家は存続していなかったため、上野氏引退と同時に砂子氏も櫨の仲買を終了した。櫨の栽培農家にとって、仲買人は重要なパートナーであったといえる。

3．櫨栽培地の概要

a　旧清水町の櫨栽培

五村および北野川における櫨栽培の特徴を理解するため、旧清水町の粟生・二川・楠本・下湯川・清水において櫨に関する聞き取りをした。

粟生の大田貢氏は以下のように語る。

上の田んぼのネキに畑があった。まいっこ上（畑よりもうひとつ山手）に杉の木が大きなってくるので買うた。そこに櫨を植えていた。櫨を切ってみかんかはっさくを植えた。やめて山椒植えた。手入れせんしあかんからスギを植えた。スギを植えて日陰になってくるので買うた。（そこは）もとは大田さんの田と違った。

櫨採るのにロープを引っ張って採っているのを見たことがある。【粟生か、と問うと】どこで見たか覚えていない。

（数年前）山側の空地に何か植えようと思った。櫨を植えたらええのと違うかと思った。

大田氏は、粟生の小一谷に住み、棕櫚加工業などを営んできた。小一谷は五村から流れる四村川が有田川に合流する地点に位置しており、五村からの産物を集積しやすい場所であった。大田氏は、材木業を営んでいた父親の代から五村との付き合いが深く、五村に櫨は多かったのは知っているが、粟生には櫨は多くなかったという。

二川の林口泰治氏は以下のように語る。

櫨は大平テルオ。二川の人。採って集めたと思う。自分でも採る。

東大谷の前北も櫨を採ったりした。専門で採りに行った人もいてる。大平のほかに櫨採り専門でやってた人もおる。宮本もやったか。自分とこになくとも採った。シュロ皮はいだり、櫨採りに行ったり、（そういった人が）ちょいちょいいてた。[9] 宮本は戦前からしていた。得本も、シュロ皮はいだり、櫨採りしてた。雇われて行った。戦前からしていた。シュロ皮はいだり、木へ登った。そういう人たちが大勢いてたよ。【百姓の人は自分でも採ったか、と問うと】百姓の人は自分でも採るけど、（櫨の）数あるから（採る人を）雇たと思う。櫨の木は簡単に採れない。ロープ引いて、傾斜がきついとこで、専門でないと難しい。【櫨は傾斜がきついところに植えたのか、と問うと】自然に生えてるのもあった。平地へ植えるのは百姓せんなん人（農業をしないといけない人）はもったいないので、（櫨を植えてある場所は）ほとんど山だった。何も作れないとこを利用してる。（櫨はこの辺りに多かったのか、と問うと）この土地のほうが多かった。【清水にはなかったか、と問うと】清水にはなかったのか。寒さの関係か。よそのことはあんまり知らない。子どものころやから。シュロは清水に行ってもある。櫨は遠井、沼、楠本にもあることはある。遠井は山椒がある。土地土地で作るものが代わってると思う。二川

は百姓、米とか作る田んぼ、農家が少ない。山林業者が多かった。一日仕事。木材の関係があったのか、村全体に当時は店が七〇軒あった。道の両側、店屋ばっかりだった。車ができてトラックが通るまで、奥の人たちはここへ出てくるのに大阪へ来るような感じやったという。子どものころ、三味や太鼓の音を聞かん日はないくらいだった。木材景気で商売の人が集まった。奥からバラで木材を流してきた。二川で筏に組んで箕島へ下った。奥の人たちはここで泊って、旅館で泊って帰る。金もうて帰る。使て帰る。三階の旅館もあった。旅館が多かった。湯浅あたりから出てきて旅館をしていた人もいる。

林口氏は、清水町誌の編纂にも従事していた方で、地域の歴史・文化に詳しい方である。集落ごとの櫨の分布のみならず、二川周辺での櫨栽培農家や櫨採りの様子もよく分かる語りであった。

二川で櫨の仲買をしてきた砂子和寛氏は以下のように語る。

櫨は北野川に一番多い。ここたし（このあたり、二川周辺のこと）にもずっとあった。スギが大きなってきたら櫨の木はまける。この上にもあった。その人たちも採ってくれた。日物川、境川、東大谷。ずっとあった。櫨は低いもんやからまける。だんだんのうなってしもうた。区区にみなあった。上野さんだけになった。

楠本の前島義郎氏は以下のように語る。

【櫨のことを聞くと】木はあった。採って出した人もあった。かぶれる人もある。ちょこちょこと自生してたものがあった。植えて栽培してたものではない。大きな木もあった。今はほとんどない。産物として出したのか、自生してたのを出したぐらいか。集めてる人があった。

小学校じゅう、木に登って櫨を採っている人を見た。家には櫨はなかった。竹の先を割ったハゾに枝を入れてねじって採る。

楠本の鶴田倫雄氏（法福寺の前住職）は以下のように語る。

西原番（楠本の小字）の村田フクタロウが集めて出荷していた。（出荷先は）たぶん野上。

ニッケ（肉桂）も村田さんが自分で掘っていた。[10] 櫨も自分で採っていた。直径八〇cmぐらいの竹で編んだ籠に実を入れていた。

下湯川の大久保家宏氏は以下のように語る。

櫨は作ってなかった。畑のきわにあった。それよりも漆の木があった。日本桐もあった。

山櫨は雑木林の中にある。実を採るやつは品種が違う。【五村は櫨が多いが、ここらになかったのは気温の関係か、世話する人がいなかったのか、と聞くと】世話する人がなかったからかもわからん。

二沢、北野川は櫨、ニッケ（肉桂）がある。

薬王寺（上湯川の寺院）の横にあるのは山櫨（写真32）。継いでいない。【実が大きい櫨があるのは知っていたのか、と問うと】おばあさんは北野川の出身。上野家から来ている。北野川へ何度も行ったことがある。

下湯川の西脇直次氏も以下のように語る。

櫨はあるけど、商売にするほどはなかった。

写真 32　薬王寺の山櫨（2022 年 6 月 20 日撮影）

大久保氏は北野川の上野氏の親戚にあたり、闇夜峠を越えて北野川の上野家に何度も訪れたことがあるという。下湯川の場合は、五村の北野川などに隣接し、親戚関係のある家も多い。北野川に櫨が多いことは認識されていた。しかし、自分たちの地域で櫨を積極的に導入することはなかった。この理由を尋ねると、大久保氏は、櫨の栽培について世話をする人がなかったからではないか、と語る。

清水の小向晃夫氏は以下のように語る。

【櫨はなかったか、と問うと】二川ダムのあたり、粟生には櫨山があった。清水にはない。自生のが少しはあった。

三章に引用した文献と、筆者の聞き取りを合わせると以下のようなことが分かる。旧清水町域で五村以外では、櫨は岩倉村・城山村に多く、八幡村でも西部に点在していた。八幡村の中東部には自生した山櫨はあるが[11]、栽培した葡萄櫨はなかった。櫨を栽培していた地域では、平地は田畑にしていたため、櫨は田畑の上の傾斜地（山）に植えていた。櫨採りは技術が必要なので、農家の人が自分で採ることもあるが、人を雇って採ってもらうこともあった。櫨を採取し、地域の櫨を集荷して出荷する人もいた。櫨栽培は衰退し、櫨山はスギ山になっていった。

b　五村の櫨

三章2節で紹介したように、日物川の井本吟太郎は、櫨が一番多かったのは五村で、三瀬川（五村の集落）にも多かった、と語っていた〔二沢　一九八一〕。しかし、五村全体に櫨が栽培されていたのではなく、五村のなかでも地域差があったようである。櫨の仲買をしてきた砂子氏は、「櫨は北野川に一番多い」、「北野川（の家）はだいたいくれた」と語る。砂子氏は、北野川以外の五村で櫨を売ってくれたのは、中原は四軒、三瀬川では二軒あったという。三瀬川には東（大国屋）のカイコ（買い子、仲買）をする家もあったという[12]。ただし、砂子氏は川合には櫨はなかったのではないか、という。二沢の櫨についても語られなかった。

現在、二沢の東本匡弘氏の家の前には櫨の木がある（写真33）。東本氏によると、接いでおらず、葡萄櫨ではないという。東本氏は櫨のことを以下のように語る。

写真 33　東本氏宅前の山櫨（2022 年 6 月 16 日撮影）

【櫨はあったか、と問うと】櫨より漆がようあった。

櫨は少なかった。採りに来ても山櫨。どこの人か知らんけど。【どこへ行ったか、と問うと】ほとんど海南だった。

北野川の岩橋よし子氏の実家は二沢であった。岩橋氏は以下のように語る。

櫨は北野川ほどもなかったと思う。北野川は櫨を作る人が多かった。

以上のように、五村のなかでも、北野川・中原・三瀬川に櫨が多く、二沢・川合には少なかったようである。このような五村における櫨の地域差について、北野川の上野氏に尋ねた。上野氏は五村の櫨について、以下のように語る。

【砂子さんに会ってきたことを伝え、砂子さんは五村でも北野川に櫨が多かったと言っていた、というと】北野川の上浦と中原の下（しも）に櫨が多かった。百姓の家にあった。二沢、川合にはなかった。個人個人がシュウロ畑の山を持っていたので、その中に櫨があった。畑の周りにもあった。【二沢、川合には百姓が少なかったのか、と問うと】二沢、川合には山林で仕事をする人が多かった。楠部、海瀬というよその人の山持ちがあった。その仕事をする人が多かった。川合には個人の百姓は少なかった。

【北野川にはよその人の山は少なかったのか、と問うと】よそ持ちの山もある。五村は「貧乏在所」で、よそ持ちの山が多い。【北野川は個人の山が多かったのか、と問うと】シュウロ畑があった。その中に櫨の木があった。【中原も百姓が多かったのか、と問うと】中原には田んぼを持っている人が何軒もあった。

上野氏の語りを受けて、北野川出身の前氏に、山林所有の特徴について尋ねた。

北野川の山は住んでた人が大部分持っている。二沢、川合は五村以外の人が持ってる山が多い。北野川の山は面積が小さいけど住んでる人が持っている。

五村に櫨が多かった、とくに北野川に櫨が多かった、というような語りは上野氏から出たものではない。むしろ、仲買人の砂子氏から語られたため、その語りを受けて上野氏に尋ねた。砂子氏、上野氏、前氏の語りを合わせると、以下のようなことが分かる。五村のなかでも櫨栽培地は均質に広がっていたのではない。北野川（とくに上浦）・中原（とくに下）・三瀬川に多く、二沢・川合には少なかった。その違いは、二沢、川合は他所の山林家が持っている山が多く、そこで働いている人が多かった。北野川（上浦）、中原は農家が多かった。北野川は地元の者が持っている山が多かった。

4．北野川における櫨栽培

a　北野川の櫨

北野川のなかでも、家ごとに櫨の本数は異なっていた。砂子氏は、以下のように語る。

櫨を畑にしてる人は見たことない。【上野さんは特別か、昔は上野さんみ

たいな人がふつうにいたのか、と問うと】上野さんは特別。上野さんは大株主だった。

何本か数えられないぐらい日当りのええとこに植えている。日当たりのええとこでないとあかん。

砂子氏は、北野川のなかでも上野氏の櫨栽培は特別であるという。砂子氏の語りを受けて、上野氏に北野川の櫨について尋ねた。

【砂子さんは北野川のほとんどの家で櫨を作っていたと言っていた、すべての家にあったのか、上野さんの家が多かったのか、と問うと】シュウロ畑にあったさけ（あったので）、みんなシュウロ畑を持ってたさけ（持っていたので）。【砂子氏が語った田中、岩橋、前の名前をあげると】前さんとこが多かった。前は二軒あった。二軒とも多かった。山広いさけ（広いので）あった。【前さんは二軒とも上浦か、と問うと】上浦の人。【上浦のほうが山が広かったのか、と問うと】よそ山を持っている人は広い。スギ山やけど。

（自分の家では）櫨は畑の畔に植えていた。【櫨は畑に植えたのか、と問うと】畑の中には植えてない。今でも岸にあるだけ。畑は狭いし、根も枝も張っていくし、覆ったかっこうになる。櫨は日当たりがいいところがいい。アキオチ（秋落ち）するところは櫨の実入らん、という。秋に早く日が落ちるところは、櫨はよくないという。【上野さんの櫨は家の周囲だけかと問うと】櫨は山のほうにもあった。スギ山になった。スギ山にしてしもた（してしまった）。

【上野さんの山は家の周りだけか、と問うと】家の周りとタカトキにある。(13)

【高時には田んぼだけでなく、櫨や棕櫚もあったのか、と問うと】櫨もシュウロもあった。

上野氏の語りを受けて、前氏に櫨のあった場所について尋ねた。

自分の家にも櫨はあった。小学生ぐらいまであった。中学生ぐらいから櫨の木を切った。スギ・ヒノキを植林していった。櫨があかんから切ってスギを植えた。櫨を切ると中は黄色かった。櫨と棕櫚があった。棕櫚がいっぱいあるなかに櫨の木があった。その中にニッケもあった。ニッケは根っこを取る。独特の味がする。ニッケと櫨と棕櫚の山が多くて、山が明るい感じだった。雑木林もあった。櫨、ニッケ、棕櫚が山のほうの収入だった。その三つだった。

棕櫚の中から櫨の木が出ていた。光が地面まで当たる明るい山だった。【棕櫚と櫨、どちらが多かったか、と問うと】棕櫚のほうが多い。【木の高さはどちらが高いか、と聞くと】櫨のほうが高い。棕櫚の上に櫨が覆う。棕櫚は陰になっても強い。自然に大きくなっている。

砂子氏は、上野氏の家では櫨を畑にしていると語るが、現地を見学すると家の横に広がる段々の土地に櫨が並んで植えられているのが分かる（写真34・35）。しかし、上野氏によると、畑に櫨を植えたのではなく、あくまで畑の岸に植えているという。畑では、麦・小豆・サツマイモ・大根などを作ったという。しかし、近年はこの場所に作物を作っていなかったため、一見すると櫨畑のようになっていた。かつては家の背後の山にも櫨を植えていたが（写真36）、そこにはスギを植林したため、家の横の段々の土地に櫨が集中して残った、と

いうことになる。

北野川の岩橋氏の家にも櫨は多かった。岩橋氏は以下のように語る。

シュウロ山が多かった。シュウロ山の中にぽつんぽつんと櫨があった。櫨山はなかった。シュウロ山の中にあった。シュウロ山は上に櫨の木が出るさけ。櫨のほうが高い。

田の岸は陰になるさけ、木が大きなるさけ、植えなかった。畑の岸には植えとったか。【シュウロ山はどのあたりにあったか、と問うと】下のほうからソラ（山の上の方）まで。谷々にいくつもある。南向きの山。カキザコ、スミャダニ、スケツネに櫨があった。【カキザコ、スミャダニ、スケツネは岩橋家の山だったのか、と問うと】ほかの人の山もある。カキザコ、スミャダニ、スケツネは谷の名前ではない。[14] これらは小字。シュウロの中にニッケがあった。

前氏の場合は自分の家で櫨の実を採取していた様子は知らないというが、昭和三〇年代に櫨・棕櫚・肉桂が混在していた山の景観をよく覚えていた。前氏の家には水田はあったが、段々畑はなかったという。そのため、上野氏の場合と異なり、山に櫨・棕櫚・肉桂などの産物となる植物を植えていたということになる（写真37）。岩橋氏の家も、前氏と同様に、棕櫚山の中に、櫨と肉桂があったという。岩橋氏によると、櫨は大きくなって稲の陰になるために田の近くには植えなかったという。ただし、畑の近くに植えることについては気にしなかったようである。

写真 34　上野氏の葡萄櫨（2022 年 5 月 16 日撮影）

写真 35　写真 34 に同じ（2019 年 12 月 23 日撮影）

写真 36　写真 34 に同じ（2019 年 12 月 23 日撮影）

写真 37　肉桂（有田川町下湯川、2022 年 6 月 23 日撮影）

b　櫨の特徴

櫨の特徴について上野氏は以下のように語る。

ナミハゼという粒の小さいのもあった。増やしたのは葡萄櫨。昔から葡萄櫨というた。ナミハゼは自生。これも売った。軽いし、粒は小さいし、蝋は少ない。

【花はいつごろか、と問うと】五月か六月。【櫨の花が咲いたらなにかをする時期といわなかったか、と問うと】蜜蜂がぶんぶんするほど寄ってくる。【上野さんも蜜蜂を飼っていたのか、と問うと】昔は蜜蜂を飼うとった。冬の守がえらい。寒さの守をせんかったら飛んでしまう。冬にどっさり砂糖をやらんなん。

【櫨の芽が出るのはいつか、と問うと】花と同じに出る。芽が出たら花房ついてるのが分かる。

【櫨はなる年とならない年があるのか、と問うと】裏年と表年がある。ならん年は裏年。なるときは表年という。【すべての櫨が同じようになったり、ならなかったりするのか、と問うと】同じ。気候でなんのかいなと思う。【櫨がならん年は、柿や栗もならないのか、と問うと】それは知らん。葉が落ちて、ちょうど今（一一月一七日聞き取り）収穫時期になっている。【ウスナリというのはならないことをいうのか、と問うと】ウスナリは裏年の年。【裏年と表年ではどのぐらいの実の差があるのか、と問うと】豊作の年の半分ぐらいしかならない。それより少ない年もある。

岩橋氏は櫨の特徴について以下のように語る。

ナミハゼやったらあかん。搾っても蝋がなかったんやろな。葡萄櫨やったらいい。

砂子氏は櫨の特徴について以下のように語る。

櫨の木は折れやすい。（実を採るときには）ロープを引っ張っていた。日当たりのええとこが実がいい。日当たり悪いとかじかむ。裏年でもあった。裏年は半分ぐらい。三分の一ぐらいのときもあった。八貫ぐらいしかないときもあった。

上野氏、岩橋氏は、ナミハゼとブドウハゼを区別している（写真38）。本章4-eにあるように、ヤマハゼもあるという。ナミハゼとヤマハゼが異なるものなのか、別称であるのかは不明である。岩橋氏は、ヤマハゼとナミハゼは一緒ではないか、という。砂子氏は本章4-hにあるように、ブドウとコハゼがあるという。植物学的にいえば、自生のヤマハゼと、田中善吉がもたらせたハゼノキがあり、ブドウハゼはハゼノキの変異種と捉えられる。葡萄櫨に変異する以前のハゼノキはナミハゼ・コハゼと呼ばれている。ただ、ヤマハゼとハゼノキは上野氏自身も明確に区別してい

写真 38　上野氏が収穫した葡萄櫨（和歌山県林業試験場提供）

ないようであり、他の話者も同様であった。

c　葡萄櫨の増殖

葡萄櫨の増殖について上野氏に尋ねた。

【葡萄櫨はどこから来たのか、と問うと】さあよ。どこから来たか知らん。おじいさんのころからあった。戦時中に、奨励でどこかから苗をわけたろ（分けてやろう）と、いってきた。戦後もあった。森林組合から話があった。

【昭和の初めに葡萄櫨の苗が来たというが、接ぎ方も教えてくれたのか、と問うと】苗が奨励できたんで（苗が奨励といって届いたので）、と聞いた。【平成三〇年八月三一日に実施された接ぎ木技術伝授の際の林業試験場撮影の動画で上野氏が語っていたのを聞いたため、田中さんのところに来たのか、と問うと】田中さんは農会の役員をしとった。【田中さんは北野川か、と問うと】うちの下。道の隣。田中さんから苗をもらった。五・六本やった。【苗は継がずにそのまま葡萄櫨になったのか、と問うと】そのままなった。その株はしっかり見やなんだ（見なかった）。継いどったのか、実生の苗か、はっきり知らん。

【戦後、森林組合からも五・六本の苗が来たのか、と問うと】森林組合からは苗はこなんだ。櫨を継いだら補助やろう、といってきた。【上野さんも補助をもらったのか、と問うと】補助はもらわなかった。そのときは継がなかった。もらうまでに継いどった（継いでいた）。森林組合から言ってきたのは終戦まもなく。二二・三年ごろ。

上野氏によると、葡萄櫨の奨励は二回あったという。上野氏の年齢から判断すると、上野氏が語る最初の葡萄櫨の奨励は昭和一〇年代であったと思われる。その後、昭和二二・三年ごろにもあったという。

岩橋氏は葡萄櫨の増殖について以下のように語る。

【葡萄櫨の穂はどこから取ったのか、と問うと】シュウロ山の中に採る櫨があるので取った。岩橋の家にたくさんあった。他人は簡単にくれん。親の代からあった。山苗を引いてきて、ないとこへ植えて継いだ。親の代に継いだのがあった。

岩橋氏は昭和二六年ごろに二沢から北野川の岩橋家に嫁いだ。岩橋家の葡萄櫨は昭和二〇年代前半までにすでに義理の父親が継いでいたようである。

このように、上野氏は昭和一〇年代から二〇年代にかけての葡萄櫨増殖奨励について具体的に語るが、岩橋氏は昭和二〇年代にはすでに葡萄櫨は山にあったという。聞き取りからは葡萄櫨が五村および北野川に入ってきたかは分からない。ただし、三章1節で触れたように江戸後期には五村（中原）に櫨（ハゼノキ）が産物になっており、二章2節で触れたように江戸末期以降に葡萄櫨が接ぎ木によって和歌山県の櫨栽培地にも広まっていた。したがって、昭和初期の五村（北野川）では、本数はわずかであったかもしれないが葡萄櫨はすでに栽培されており、増殖奨励をしてハゼノキ（ナミハゼ・コハゼ）をより一層、葡萄櫨へ転換しようとしていたと考えられる。

d　上野家の櫨の変遷

上野家における櫨の変遷について上野氏に尋ねた。

櫨は一二〇～一三〇本ある。自分が採り始めるときには二〇本ぐらいだった。一〇〇本ぐらい増やした。高等小学校を卒業してからずっと櫨を採っている。昭和二一年に卒業した。それまでも小学校五・六年じゅうから、父親について、採り歩いた。父親もおじいさんのときも櫨はあったと思う。

【上野さんが小さいころにおじいさんもいたのか、と問うと】おじいさんはいた。櫨採りはしていた。継いだのは言ってなかった。【上野さんが小さいころは、おじいさんとお父さんが櫨採りをしていて、上野さんも手伝っていたということか、と問うと】そう。

【櫨の接ぎ方はだれに教えてもらったのか、と問うと】父はあんまり継がなんだ。ちっと継いだぐらい。

【おじいさん、お父さんがあまり継いでなかったのに上野さんが葡萄櫨を継いだのはなぜか、と問うと】仲買をしていた二川の砂子さんに聞いた。ナミハゼは目方軽いし、安いので、葡萄櫨にしたほうがいいと、海南の製造所から聞いて、葡萄にしていった。ナミは粒が細こいし、値段がロクネ（六割の値段）しかせんかった。

ナミは植え替えたり、切ってしもたりした。しまいには重い、値段のええやつばっかりにした。【子どものころはどちらが多かったか、と問うと】ナミのほうが多かった気がする。

砂子氏は以下のように語る。

上野さんはコハゼばっかりだった。おじいさん（父親）が葡萄にしたほうがいいと言って、葡萄に継いでいった。

【葡萄櫨はもともとどこから来たのか、と問うと】山にあったのと違うか。寒くなったら鳥が食う。鳥が糞をして生えてくる。コハゼをみな継いだ。一面に植わっている。葡萄は正味の値で買うてくれる。

下湯川の大久保家宏氏は、上野家の櫨について以下のように語る。

【上野保二さんが櫨を増やしたというが、もともとはあったか、と問うと】前から櫨があった。でかい木もあった。

上野氏の家では、昭和初期以前からハゼノキ（ナミハゼ・コハゼ）が植えられていたようである。上野氏の家には大きな櫨もあったというため、江戸末期から明治時代にかけて櫨（ハゼノキ）が植えられた可能性がある。上野氏の場合は、語りから判断すると、葡萄櫨は外部から導入したというよりも、山にあったものを仲買人や県などの勧めによって増殖したと考えているようである。

e　櫨の接ぎ木

上野氏に葡萄櫨の接ぎ木について尋ねた。

実生の山の苗木を引いてきて継いだ。台木を引いてきて葡萄の穂を継いだ。台木はナミハゼでいい。継いだら三・四年でなりはじめる。【ほかの地域では櫨を低く育てているところもあるが、というと】低くしたほうが採りやすいが、自分のところではそのままにしていた。

【櫨はつきやすいのか、と問うと】つきやすい。【山椒よりもつきやすいのか、と問うと】山椒も継いだ。山椒よりもつきやすい。【ほかに継いだもの

は、と問うと】柿も継いだ。【なんの柿か、と問うと】富有柿。富有柿を継いだけど、鹿に食われてしもた（食われてしまった）。

【台木は冬にひいてくるのか、と問うと】冬、冬眠したヤマハゼをひいてきた。【どのぐらいの大きさか、と問うと】指ぐらいの大きさなかったら接ぎにくい。細いのを接ぐと大きなんのに時間がかかる。【一月か二月ごろにひいてくるのか、と問うと】一月か二月。冬眠してるのをひいてきて植えた。【接ぐのは夏か、と問うと】盆過ぎ。つわっとるとき。[15] 熟成して、葉が落ちてしもたら皮がむけんようになるさけ。【冬にひいてきて、その夏に接ぐのか、と問うと】あくる年に接ぐ。【夏芽はだめなのか、と問うと】夏芽はだめ。春芽でないと穂がかとなってない（硬くなっていない）。[16]【接ぎ方をハラツギというのか、と問うと】ハラツギという。【ほかの接ぎ方の名前はあるのか、と問うと】ハラツギ以外は知らない。櫨は上を残しといて接ぐ。継いだところより三〇cmほど上を残しておく。【なぜ残すのか、と問うと】上へもセが上がるさけ、つきやすいんじゃないかな。柿、山椒は切り口へ接ぐさけ、上はなんにもない。（上を残すのは、穂を）縛りつけるのにもいい。かけんように幹に縛り付ける。【皮をむくのはシュロをむく庖丁か、と問うと】小刀やったらなんでもいい。皮をむくときは木の分を削らんようにせんと。穂は皮と木の分を削る。【林業試験場作成の資料に形成層という説明があったため、形成層という言葉は昔から言ったか、と問うと】言わなかった。木と皮の境、そこへ継がなあかん。木の部分を削ったらあかん。【皮の名前を聞くと】外の皮は荒皮。中の皮は甘皮。甘皮は緑の部分。台木は削らんでも、皮を引っ張ったら自然にはずれら（はずれるよ）。穂のほうも甘皮も削る。皮の分が残っとったらあかんし、木の部分を削りすぎてもあかん。[17]【加減が難しいですね、というと】加減は難しない（難しくない）。

【赤土をつけてかためるのか、と問うと】穂が乾かんように赤土か苔を縛り付ける。わら縄で巻いた。【シュロ縄も使ったか、と問うと】シュロ縄でもいい。春までもって、芽が出たらもういらない。[18]

【継いでから実ができるようになるまでどのぐらいかかるか、と問うと】継いだのが太い木だったら三年ぐらいしたら実がなりだす。ナリホ（よく実がなる穂のこと）だったらその年になる。【収穫できるようになるまでは五・六年か、と問うと】五・六年。【櫨の寿命はあるのか、一〇〇年越えると実ができにくくなるか、と問うと】古い木でもなる。【木が古くなると植え替えることはなかったのか、と問うと】植え替えることはなかった。

以上のように、上野氏は葡萄櫨の接ぎ木の技術をきわめて具体的に語る。平成三〇年八月三一日に実施された接ぎ木技術伝授のときには自宅で実演をしていた。筆者は参加していないが、その際に撮影された写真・動画（和歌山県林業試験場提供）、および林業試験場特用林産部作成の「上野保二氏の「接ぎ木」技術」という記録をもとにできるだけ具体的なことを上野氏に質問した。上野氏の接ぎ木技術の特徴としては、夏に接ぐ、ハラツギをする、ということである。なお、接ぎ木技術の詳細は林業試験場特用林産部作成の「上野保二氏の「接ぎ木」技術」において、林業試験場の見解を含めてまとめられているが、本稿ではあくまで上野氏に聞き取りをした内容を記述するにとどめている。

ところで、前氏は子どものころ、上野氏が葡萄櫨を継いでいたことを知っている。前氏は以下のように語る。

子どものころ、山で遊んでいて、上野さんに接ぎ木した櫨を折るなと言われた。今はスギになってしまっているところ。（前氏に現地に案内しても

らった。上野さんの家の奥に谷がある。その谷の上のほうであったという。）上野さんは接ぎ木をちょこちょこやってた。端から次の枝が出てくる。芽が出てる。子どもが遊んでると折ってしまうので、折るなと言われた。伸びかかった枝があった。何か所かあった。畑と違って、家のまっすぐ上のほう。今は山になってる。今は櫨はない。当たったりして触ったら折れるし。小学生のころだった。昭和三〇年代後半。自分の親が継いだのは知らん。

前氏の証言により、上野氏は少なくとも昭和三〇年代後半までは葡萄櫨を接ぎ木して増やしていたことが分かる。

調査の過程で、前氏より、北野川の岩橋よし子氏も、葡萄櫨を接ぐことが得意であったことを教えていただいた。岩橋氏にも接ぎ木のことをうかがった。

山櫨の太くないのを植えて、根付いて大きなりだした時点で、台木へ葡萄櫨の穂を接ぎ木する。年中いつでもできるわけでない。接ぎ木の時期は春と秋の二回。皮剥けるのは、つわる時期。木がつわった時期に接ぐ。継いだら全部つくかというとそうではない。時期がずれたら全然つかん。岩橋に嫁いできて、舅に教えてもらった。夫が継いでもいっこもつかんので（まったくつかないので）、舅が教えてくれた。接ぎ方が悪いのか、時期がずれてるのか。（舅が）いっぺん継いでみ、と教えてくれた。

山櫨は太くない。山刈りするとき、櫨の苗を残しといて、引いてきて、ところどころに植えた。三年ぐらいしたら採れる。シュウロ山にとぼんとぼんと植えた。山苗は自然に生えとる。太なったらつきにくい。【櫨の苗はいつ引いてくるのか、と問うと】真夏はあかん。春と秋しかええと思う。葡萄櫨の木の穂を取って接ぎ木する。おそおそまで（かなり遅くまで）継いだ。

山苗、継いでない櫨を畑のはしとかに植えた。山櫨を台木にして接ぐ。【接ぎ方を問うと】皮を取ってしまわんと、包丁の先で剥く。穂を挟んで、テープでいごかん（動かない）ように穂を巻く。【接ぐのは一か所か、と問うと】いくつもしたらあかん。一か所だけ。できるだけ下の方に接ぐ。接ぎやすいとこを選んだ。木がでこぼこしてたらようつかん。（継いだ）木が大きなりだしたら、山櫨の分を切って捨てる。柿の木も継いだ。夫は几帳面すぎるのか、つかなんだ。

継いだところにナイロンをかぶせて飛ばんように縛った。穂の芽がいごいてるのが分かる。霜にあったら芽いかれる。ナイロン袋が飛ばんようにきれで結んで、すかして中が見えるようにしていた。袋を取りに回った。ついとる木もある。一〇本が一〇本つくかというとそうでもない。【一年で何本ぐらい継いだのか、と問うと】何本か分からん。毎年継いだ。柿の木はつきにくい。櫨はつきやすかった。接ぎ木しだしたらおもしろい。早よいじったら、せっかくついとるのにだめにしてしまう。穂を継いだのは台木から養分がいくまでおいとく。

葉が落ちて、芽がいごかんようになったら穂を取った。ええ穂を取る。なる穂を取る。よその盗めへん（他人の櫨を取ってくることはできない）。濡れ新聞で巻いてナイロンで巻いて春まで冷蔵庫で入れておく。芽がいごくようになったら継いで、芽がいごきだす。芽がいごかんときに穂を取って、新聞を濡らして、口を縛らんと、冷蔵庫の野菜室に入れとく。木がつわってきて、剥けるようになったら継いだ。春しか（春のほうが）つきやすかった。秋は接ぐ時期が短かったと思う。接ぎ木しだしたら、いじになってくる。いじるさけだめにしてしまう。飛ばんようにナイロンをかぶせた。空気を入れてやらんと枯れてしまう。ほとんど春に継いだ。接ぎやすい。切り出しナイ

フで台木の中ですぐいとこに、木と皮の間にまっすぐ庖丁で切り目を入れる。穂もまっすぐに切る。台木のまっすぐに切ったとこに穂の切ったとこをくっつける。くっついてなかったらつかん。【上野さんは赤土や苔をつけたというが、というと】苔はしない。赤土を練ったのをひっつけてナイロンをかけた。赤土は粘るさけ。冷蔵庫がないとき、土にいけとったこともある。

岩橋よし子氏は、舅に接ぎ木の技術を教えてもらい、葡萄櫨を継いでいた。よし子氏の娘の山本洋子氏は、自分が物心ついた昭和三六年ごろには家に冷蔵庫があった、扉がひとつしかない冷蔵庫であった、という。したがって、冷蔵庫を設置した昭和三〇年代後半から四〇年代ごろまで櫨を継いでいた、ということになる。夫の永三氏は、石垣を積むなど、器用な人であったという。それでも、櫨を接ぐことは得意ではなかったようである。洋子氏は、よし子氏が「接ぎ木ほどおもしろいもんはない」と言っている、という。岩橋氏の事例は、北野川でも上野氏のみがこの技術を有していたわけではないこと、女性でも接ぐことがあったこと、接ぎ木が得意かどうかは個人個人で違っていたということ、などを示している。

f　櫨の採取

実の採取について上野氏に尋ねた。

一一月に入ったら、葉散ってしもたら、そのころから収穫。【一〇月に紅葉するんですか、と問うと】紅葉はちょっと早い。紅葉する木は櫨以外にあんまりない。ザツギ（雑木）の木はあるけど。櫨の収穫は一二月、一月ごろまで。木が広うようけあったら一月まで。一二月いっぱいぐらいにおおかた採った。長いことおいとったら鳥に食われる。細こいナミは早生。先に採る。葡萄はあとから採った。一二月になるな。葡萄は葉散って粒ばっかりになっても青い。採っても袋に詰めないで納屋に置いといてよう乾いてから袋に詰めた。【どのぐらい置いておくのか、と問うと】一〇日ぐらいか。広げとく。【ムシロの上かと問うと】そうやな。木でよう乾いてから採ったら、そういうことせんでもええ。【ナミと葡萄は収穫の時期がずれるのか、と問うと】櫨はちょうどええようになってる。

【一日でどのぐらいの量を採ったのか、と聞くと】葡萄の採りやすい木で一〇貫ぐらい採った。大きな木で三本か四本で、七・八貫から一〇貫ぐらい採った。ナミは軽いさけ、かさ採っても軽いさけ（多く採っても軽いので、そんな目方にはならなかった）。値段は葡萄のロクネ（六割）しかせんかった。【どちらのほうが採りやすいのか、と問うと】ナミのほうが採りやすい。もがきやすい。葡萄は採りにくい。元のほうはもがきやすい。末のほうはもがきにくい。ナミも葡萄も一緒。

【素手で採るのか、と問うと】手袋さして収穫した。【上野さんでもかぶれるのか、と問うと】かぶれへんけど、手の皮がいとなる（痛くなる）。

【カギを使うか、と問うと】カンギで枝を引く。引き寄せにくいところはロープで引き寄せといて、それをまたカンギで引き寄せる。【何の木か、と問うと】竹。先をちょっとカンギに曲がるように切って、火で焼いて曲げてカンギにする。山にちょうどカンギにええ木があったら切ってもええ。【柄の部分は別の木か、と問うと】柄の部分も竹。一メートルあまりの長さ。細い竹。【モウソウか、マダケか、と問うと】マダケでもハチクでもなんでもええ。握りごごちのええ竹。

ナミハゼと葡萄櫨では収穫時期がずれるという。収穫時期はナミハゼのほうが早いという。上野氏の櫨の実採取を要約すると、木に登り、ロープを掛けて枝を引き寄せ、さらにカンギで枝を引き寄せて（写真39・40）、手で実をもぎ採る、というものであった。

岩橋氏は櫨の採取について以下のように語る。

足場つけて木に登って綱を張って採った。櫨はさくい（さけやすい）のと違ってやわらしい。折れるということはない。ロープ持って上がって、引き寄せて綱を足場にした。しゅーなっこいさけ（やわらかいから）、カギで引っ掛けても折れにくい。綱を足場にして枝と枝を縄で結わえて縄を足場にして木に登って採った。

櫨は葉が落ちたらもぎとりやすい。カギは細い竹で、先は株のほうをえぐって曲げて針金でくくって伸びんようにした。【どのぐらいの量を採ったか、と問うと】木にもよる。採りやすい木ととりにくい木がある。

【櫨は接ぐのがおもしろかったのになぜやめたのか、と問うと】年とってきて、腰悪かった。木から落ちてけがしたらもとこもない。落ちんぐらいの気力があるときでないと櫨採りできない。

岩橋氏も、上野氏と同じように木に登って櫨の実を採取していた。女性も櫨の木に登って実を採取することがあったということになる。岩橋氏は、櫨だけでなく、棕櫚も木に登って皮を剥いていた。上野氏によると、女性で櫨の木に登って実を採っていたのは、このあたりでも珍しい、という。

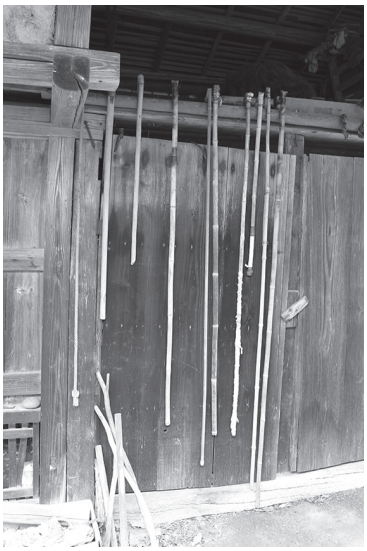


写真39　上野氏のカンギ（2022年5月16日撮影）

上野氏の場合は、本章4-gにあるように、棕櫚よりも櫨のほうが好きであったという。岩橋氏に櫨と棕櫚の皮剥きとどっちが好きであったか、と問うと、「年中、なんどかど仕事せんなん（なにかしら仕事をしないとしょうがない）。せなしゃーない（しないとしかたない）。どっちもおもしろい。」と語る。山の産物を採取する仕事のなかでも、個人によって得意不得意、好き好きがあったようである。なお、上野氏、岩橋氏ともに、櫨の採取をやめたのは、高齢になったからであった。岩橋氏は上野氏よりも早くに櫨採取をやめていたが、上野氏は平成末期に九〇歳近くになるまで櫨の実採取を続けていた。

g　櫨の手入れ

櫨の手入れについて上野氏に尋ねた。

【櫨の手入れは、と問うと】冬に苔かきをした。古い木は苔ができる。実を採ってから苔かきをした。【道具は、と問うと】熊手とか。キュウリの皮をむくようなかっこう。登って行ってかく。若い木は苔つけへんけど、古い

写真40　写真39に同じ（2019年12月23日撮影）

木は苔がつく。【ほかの手入れは、と聞くと】畑の岸に杭を打ったり。冬に肥料をやったり。肥料をやると粒はええ粒になる。【どんな肥料ですか、と問うと】化成肥料。【昔はどんな肥料でしたか、と問うと】昔は畑の作物を作ったので、畑にやった肥料を根で吸うたかして、特別な肥料はやれへん。流れてきてるさけ。

草刈りはせんなん（しないといけない）。（櫨は）消毒もしやせんし（しないし）、収穫のときに枝を切ることはあるけど、特別剪定もしやせんし。消毒や剪定をすることいらんし、しやすい。シュウロ皮はゴミしてえらい（ごみが出て大変）。バチ取らんなんし（皮の硬い部分を取らないといけない）。ほこりまみれになる。（シュウロの話は、上野さんから出た。櫨がしやすいという流れで、シュウロは大変という言い方で出てきた。）木登り好きなもんやったら櫨のほうがええ。シュウロは包丁といって刃物を使わんなんし。シュウロ皮剥きのほうがしにくい。【シュウロも木に登るんですよね、と言うと】足場縛りつけもて（縛りつけながら）、高こなったら登らんなん（木が高くなったら登って皮を剥かないといけない）。【シュウロは一日どのぐらいむいたか、と問うと】七〇〇枚から八〇〇枚。上手な人だと一〇〇〇枚ぐらい。木にもよる。場所のええ、剥きやすいとこか、剥きにくいとこか、にもよる。太い木か、細い木か、にもよる。【一〇〇〇枚で一荷か、と問うと】一荷。二五枚を二〇束にした。一束で五〇〇枚。枚数で売る。櫨のほうが世話ない（やりやすい）。包丁や鎌を使わんなん（使わないといけない）。枝を切らんなん（切らないといけない）。枯れた枝は手か鎌で取った。縄になるまでゴミまみれになる。

砂子氏は上野氏の櫨の手入れについて以下のように語る。

上野さんははりこんで買うてあげなあかん。上野さんは一本一本、肥をみなやった。ええ櫨がなった。時期になったら剪定する。ならん枝は切る。ええ実がなっていた。

上野さんは一本ずつ根周りへ肥をやった。農協から山の肥を買ってきて。剪定に回るし。そのじゅう、こってた。

上野氏は櫨の手入れを熱心にしていたようである。周辺の櫨栽培者のことも知っている砂子氏から見ても、上野氏は櫨栽培に「こってた」（熱心であった）という。また、上野氏は棕櫚と櫨を比較して、棕櫚はほこりまみれになるので大変であるが、「木登り好きなもんやったら櫨のほうがええ」「櫨のほうが世話ない」と語る。棕櫚の皮剥きを得意としていた人たちは、一日に一〇〇〇枚剥いたと語ることが多いが、上野氏の場合は一〇〇〇枚も剥くことはなかったようである〔藤井　二〇二二〕。上野氏自身、若いころから櫨と棕櫚を栽培するなかで、より櫨の栽培を好んでいたことが分かる。

また、前氏によると上野氏は次のように櫨の手入れについて語っているという。

櫨はすりばちにしとくという。日が当たらんので。櫨に限らず、梅でも山椒でもする。中を抜く。真ん中を伸ばすと日が当たらんので、横から四方八方に伸びるようにする。上野さんがすり鉢にせなあかんぞ、と言っていた。

上野氏の語りでは、櫨は自然に伸ばしていたというが、前氏が聞いていたところでは上野氏も櫨の枝が張るように工夫していたということになる。

h　櫨の出荷

収穫した櫨の実の出荷について上野氏に尋ねた。

【実を入れる袋は何貫入るのか、と問うと】木へ持って登るやつは、思うようなやつ（大きさは決まっておらず、思いついた適当な袋というような意味）。【ドンゴロスは何貫入るか、と問うと】七・八貫。大きなのは一〇貫も入る。ボウツギでかけた（かけて目方を計った）。【どのように下したのか、と問うと】一個ずつ負うて下した。【道具があったか、と問うと】ひもで負うた。一輪車に載せて下したこともある。【仲買の人は道まで何で買いに来たのか、と問うと】車で来ていた。【昔は自転車で来てたか、と問うと】自分が知っているころには車で来ていた。

仲買人が蝋屋へ持って行った。金屋町の金屋に蝋の製造所があった。アズマ、大国屋。はよやめた。海南の且来の吉田は残っていた。仲買人は吉田へ持って行った。五村にも山中さんが蝋をしめていたという。ぼくら知らん。特別財産家だった。広う山を持っていた。

二川の仲買人は終戦なってから仲買をしだした。砂子さん。今いるのは仲買をしていた人の子ども。父が仲買をしていた。父の跡を継いで、自分が採ったら持って行ってくれた。

岩橋氏にも櫨の出荷のことを尋ねた。

【櫨を売った人はだれか、と問うと】二川の砂子さん。買うてくれる人だった。砂子さんは車で取りにきてくれた。袋も持ってきてくれた。

【砂子さん以外に売った人はないか、と問うと】前ヨネイチさん、金屋へ出て行った人。北野川から出た人。櫨を買いに来た。自分とこで櫨は搾ってなかった。何年もせんまに（しないうちに）、砂子さんに代わった。ヨネイチさんは買いに来んようになった。

岩橋氏の語りを受けて、上野氏に再度、前ヨネイチのことを質問した。

【前ヨネイチさんは櫨を買っていたか、と問うと】ヨネイチさんはおじさんからもろた山に櫨があった。金屋の大国屋へ持って行った。ヨネイチさんは北野川から金屋へ出た。【ほかの人の櫨を買い集めていたわけではないのか、と問うと】自分とこの櫨を持って行った。

上野氏、岩橋氏は櫨の栽培農家であるため、出荷したあとのことは詳しく知らない。この点は、仲買をしていた砂子氏が詳しく語ってくれた。

【お父さんが櫨の仲買を始めたのはいつか、と問うと】戦争終わってから始めた。そのころはコハゼもみな行った（海南へ）。コハゼは六分だった。コハゼは六分になおした。コハゼから、いっぱいあった。

金屋にアズマさんがあった。今はない。家で櫨を搾っていた。自分の家では海南の吉田に持って行った。ものすごいほこる。（吉田さんは）真っ黒けの顔をしていた。干して搾る。吉田には何十年もいっていた。親はほうぼ（あちこち）へ買いに行った。自分のところはずっと吉田。親が何かつながりがあったんだろう。自分は貨物を持っていたので、積んで海南へ行った。上野さんはかたい人で、うちばっかりいうてきた（砂子氏の家にだけ売ってくれた）。

櫨はぱんぱんに張ったやつがいい。（ゆき子さんは、大豆みたいな感じ、という。）かじかんだやつはあかん。軽い。【できがいい悪いは、採る人で違うのか、と問うと】一本の木でも実は違う。櫨は濡らしたら絶対にあかん。海南のおやっさん（吉田氏）によう言われた。（採った人に）乾かしてもろて買う。

北野川の岩橋永三さん、田中さん。そこたし（そのあたり）の人も（櫨の実を）持って行ってくれと積んでた。田中さんは、うちにもカドにあるさけ（うちの庭にも櫨があるから持って行って）、といっていた。大きな俵一貫もないぐらい。二〇～三〇貫あったんだろう。岩橋の嫁さん（筆者注：岩橋よし子氏のこと）がずっとしてた。ようもて来てくれた。【ここまで持ってきたのか、と問うと】道まで出していた。車で買いに行った。上野さんはキャタピラで出していた。あんなところは担いで持ってこれない。【キャタピラの前はなんで運んだのか、と問うと、ゆき子さんが一輪車であったか、と言う。】発動機のついた荷物運ぶもの。三つか四つ積める。上野さんの家へ行く道はつえてる（崩れている）。道がかけてしもてる。上野さんの櫨は出すのもなんぎした。

ふつうはおろしてもろてなんぼ。砂子さんからキャタピラを上野さんに持って行った。最後のほうは出すのを手伝った。（ゆき子）

上野さんは多いとき、一年で五〇〇貫あった。海南へ車で三回行った。最盛期やった。吉田から現金をもらって、上野さんの家に持って行った。

【目方はどのように量ったか、と問うと】チギで計った。家で計った。百姓の人も計ったが、うちで認めましたとエボ（荷札）をつけた。針金のついたこよりみたいなもの（写真41）。紙を切っている。そこに何貫と書く。（吉田さんに対して）間違いございませんという証明。

上野さん以外では、多い人で一五〇貫ぐらい。上野さんは多かった。

エボには丸の中に正と書いて、その下に、何貫と書いた。丸の中に正は、「正味」という意味。自分の家でも控えておく。

実はドンゴロスに入れる。吉田さんからもうてくる。タテへ一〇貫入る。

【タテとドンゴロスは違うものか、と問うと】同じ。

ハクタ（入りきらんやつ）は紙の袋に入れた。（ゆき子）

正味を書かんと下（しも）へ出せん。ドンゴロスは吉田で預かる。カネに加と書いて、カネカという印が書いてある。

栽培者の上野氏、岩橋氏は仲買人の砂子氏に櫨を出荷してもらい、砂子氏は製蝋所の吉田氏に集荷した櫨の実を販売していた（写真42）。昭和二〇年代までは北野川から旧金屋町へ出た前ヨネイチが大国屋へ出荷するという経路も

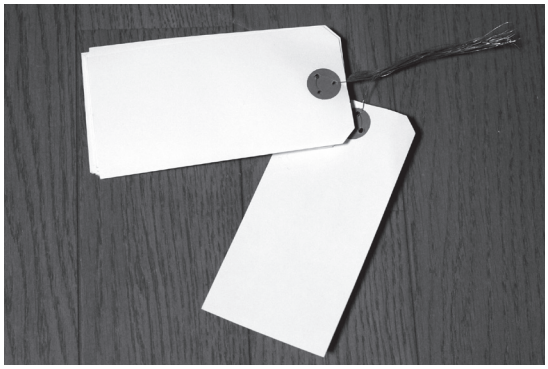


写真41　エボ（2021年11月22日撮影）

写真42　吉田製蝋所の倉庫に貯蔵される櫨の実（2022年4月27日撮影）

あった。しかし、砂子氏が昭和二〇年代から櫨の仲買を始めると、北野川の人たちは砂子氏を通じて海南市の吉田製蝋所へと出荷するようになっていった。このように、北野川からも櫨の出荷ルートは金屋方面、海南方面の二つがあった。そして、出荷ルートは、仲買人がもっていた人脈を利用して形成されていたと思われる。

このように、栽培者・仲買人・製蝋所の三者がつながることで、櫨・木蝋産業が成り立っていたことがうかがえる。なお、現在の吉田製蝋所の経営者である吉田忠司氏・悦子氏夫妻に聞いたところ、吉田氏は砂子氏から櫨を買い取ってきたため、上野氏には直接会ったことがないという。地域の櫨農家のことを把握し、集荷して回る仲買人の知識と経験も櫨・木蝋産業にとって重要な要素であったことが分かる。櫨がある場所までの道が悪かったり、栽培者が高齢になって道まで出しにくくなった場合、仲買人が手助けしていたという。仲買人にとって、上野氏が仕入れ先として重要であったことを示している。

砂子氏は、上野氏の最盛期を自分が二〇才のころという。砂子氏の年齢から判断すると、昭和三九年ごろと思われる。当時、上野氏の櫨は多いときには一年で五〇〇貫あったという。その他の人は多くて一五〇貫であったというため、昭和中期時点での上野氏の収穫量は周囲の家に比べると飛びぬけて多かったようである。

六　考察

1．有田川流域における櫨栽培の変遷と地域差

a　櫨栽培地の拡大

有田川流域では、江戸時代以来、一貫して同じ地域で櫨栽培をおこなってきたわけではない。江戸中期に田中善吉が櫨を広め始めたときには、下流域から中流域で櫨栽培が開始されている。その後、江戸後期から明治時代にかけて中上流域にも広まっていった。文化七年（一八一〇）時点では、中原には産物になっていたが、周辺地域では産物となるほどに普及していなかったと思われる。具体的にいえば、同じく五村の北野川・三瀬川、周辺地域の岩倉村・城山村一帯あたりには、江戸後期から明治時代にかけて普及していったと考えられる。

その後、明治二九年（一八九六）時点では、製蝋所が岩倉村に三か所、五村に一か所、城山村に一か所あることから、明治初期までに岩倉村・五村・城山村・八幡村西部、つまり清水町西部まで櫨栽培が広まったことが分かる。

以上のように、有田川流域における櫨栽培は、下流域から中流域において始まり、徐々に中流域から上流域に広まっていったと考えられる。なお、この場合の櫨は田中善吉がもたらしたハゼノキのことを指している。

b　有田川流域における櫨栽培の地域差

有田川流域における櫨栽培は時代的に変遷がみられるが、生態的に見た場合においても、地域差が認められる。清水より上流域ではハゼノキ栽培は盛んになることはなかった。有田川町上流域にはヤマハゼが自生していた。ヤマハゼの木を年中行事において儀礼に用いることはあった〔有田川町教育委員会　二〇一七〕。しかし、実を採取して売ることはほとんどなかった。

こうした背景にはおそらく、気候的な問題がある。みかんは粟生より下流に多く栽培される。粟生よりも上流ではみかん栽培が盛んになることはなかった。温暖な気候に適しているみかんは、寒冷な気候の地域では広まらなかったということになる。櫨の場合も、寒冷地での栽培はむかない、という。紀美野町で櫨栽培の地域差を調査した場合も、旧野上町を中心とした町の西部に櫨が多く、旧美里町を中心とした町の東部には櫨は少なかった〔藤井　二〇一九〕。

有田川町においても、紀美野町と同様、櫨栽培が盛んなのは下流域から上流域の西端までであった。

c　明治中期以降の変遷

櫨栽培は江戸中期以降、次第に上中流域へと広まっただけではなかった。明治中期以降、縮小・衰退した地域もある。一方で、その後にさらに栽培を拡大した地域もある。有田川下流域は櫨伝来、普及の拠点であった。江戸中期から栽培が開始されたが、明治中期までに櫨はなくなった。また、中流域でも江戸中期より栽培がおこなわれたが、明治中期までにみかんに転換、堤防改修などで櫨は縮小した〔金屋町誌編集委員会　一九七三〕。つまり、下流域、中流域では時代とともに、より収益の多い商品作物に転換したのである。また、下流域から中流域では、明治中期以降、河川改修などもあって櫨が減少した。

櫨と似た傾向をもっている商品作物として肉桂がある。江戸中後期には、肉桂も有田川中流域の村において『紀伊名所図会』に描かれるほど盛んであった。しかし、明治以降は生産の中心は五村に移っていた。有田川流域では江戸時代から栽培作物が変遷してきた。下流域、中流域は商品作物の転換が早かったといえよう。

一方、上中流域は気温や地形も考慮しつつ、その土地により適した作物を導入してきた。上流域の西端では中流域よりもやや遅れて櫨や肉桂栽培が広まったようである。地形・土壌・気候などを活かし、その土地でより収入を得られる産物を追求してきた。昭和初期に昭和福櫨や葡萄櫨の奨励があり、櫨栽培を拡大が図られている。とくに北野川には昭和中期まで葡萄櫨の接ぎ木をして栽培を拡大する人もいた。その結果、北野川では平成末期まで櫨栽培農家が存続することになった。五村の周辺地域では昭和中期以降、スギ・ヒノキの植林、柑橘（中下流域）や山椒（上中流域）への転換などが図られていったが、北野川では平成末期に至るまで櫨栽培が継続されたということになる。

2．五村（北野川）における櫨栽培の差異

a　北野川の櫨栽培

五村のなかでも、櫨栽培地に地域差があった。櫨は北野川・中原・三瀬川に多く、二沢・川合にはあまりなかった。この背景には、二沢・川合は他所の山林家が所有する大規模な山林が多く、その山林で山仕事に従事する人が多かった、ということが関係していたようである。また、北野川（とくに上浦）や中原は農家が多く、北野川は二沢・川合に比べて個人所有の山が多かった。さらに、北野川は二沢・川合に比べると谷としては小さいが、集落南側の山（北向き）が低く、集落および人家周辺の田畑・山林（北野川の北斜面、南向きの山）への日当たりがよい。

このように北野川（とくに上浦）は、個人所有の山が多いこと、農業従事者が多いこと、集落および人家周辺の田畑・山林への日当たりがよいこと、などが重なった結果、櫨を棕櫚や肉桂を組み合わせて栽培することが多くなったといえよう。

b　上野氏の櫨栽培

周辺地域と比べると、北野川には櫨を栽培している家が多かった。しかし、北野川のなかで見ると、家ごとに櫨栽培の差は存在していた。まず、北野川にも山仕事に従事している家はあったため、そうした家では農地が少ないので櫨はあまりなかった。農家の場合は、家ごとに、自家の農地の地形・日当たりなどを考慮して田畑とともに、棕櫚・櫨・肉桂・楮・三椏などを組み合わせて収

入を得ていた。

上野氏の家では、田・畑を耕作しながら、周囲の山林で棕櫚・櫨・肉桂・楮・三椏などを栽培・採取し、収入を得ていた。北野川の上浦の集落は、全体としてより日当たりのよい谷の北側斜面に家々が立ち並んでいた。岩橋氏、前氏の家でも北野川の北側斜面の山（南向きの山）に棕櫚山を持ち、櫨・肉桂などを混植して育てていた。

とくに上野氏の家は北野川の上浦のなかでも、最も高いところに立地しており、家の周囲に農地や山林を所有している。上野氏は、五章4-aにあるように、「櫨は日当たりがいいところがいい。アキオチ（秋落ち）するところは櫨の実入らん」と語る。上野氏の農地は、北野川のなかでも日当たりがいいため、櫨栽培には向いていたといえよう。

ただし、上野氏の父の代までは、櫨はあったが上野家の作物のなかでの比重は高くなかった。上野氏は葡萄櫨の接ぎ木をして葡萄櫨を増やしていった。昭和一〇年代から三〇年代にかけて、肉桂・楮・三椏もまだ栽培されていたが、上野氏が農業を継いだときは棕櫚・櫨がより重要な収入源であった。上野氏は棕櫚があまり好きではなかったと語る。櫨栽培がより好きであったという。したがって、上野氏は棕櫚栽培をやめて櫨に特化していった。

また、岩橋氏は、夫よりも葡萄櫨の接ぎ木技術が得意で、接ぎ木をするのが好きであった。しかし、岩橋氏の場合は、上野氏のように櫨に特化するわけではなく、少なくとも昭和後期までは櫨採り、棕櫚皮剥き、椎茸栽培をすべておこなっていた。岩橋氏の場合は、櫨の接ぎ木がとてもおもしろかったというが、ほかの生業も等しくこなしてきた。

上野氏の場合、櫨にこだわり続けたのは、だれでも簡単にできるものではなかったからではなかろうか。ほかの人が追随しにくいために、自分ならではの技術として櫨の接ぎ木、櫨のみ採取を継続してきたといえる。接ぎ木技術、実の採取技術ともに、特殊な技術であり、個人によって得意不得意、好き好きが異なる。北野川では、接ぎ木、採取ともに、平成時代まで継承してきたのは、山村の人びとがこだわって継続してきたからであった。なお、紀美野町の七良浴氏も櫨が好きであったといい、九〇才を過ぎたころまで櫨採りを続けていた。なお、七良浴氏が櫨採りをやめたのも上野氏とほぼ同じ時期であった。

上野氏、岩橋氏、および七良浴氏が櫨栽培をやめたのは製蝋所や仲買人から櫨の需要がなくなったわけではない。製蝋所によると、和蝋燭屋からの櫨の需要は高いが、櫨を採る人がなくなった、という。周囲の櫨を採る人が減っていくなかで、とくに上野氏や七良浴氏は、自分たちが好きな仕事にこだわりを持ち、自分たちの技術に誇りを持って、製蝋所・仲買人から求められるために高齢になっても木に登って櫨の実を採り続けたと思われる。

3．櫨に対する知識・技術の差異と継承

a　櫨栽培者と仲買人と製蝋所

櫨に対する知識や技術にも人によって差異がある。栽培者の場合は、櫨の木をよく見ている。ナミハゼ（コハゼ）とブドウハゼの違いを理解し、肥料のやり方、実のなる時期、裏年・表年、実の採取方法、などを経験的に身につけている。上野氏の場合は、日当たり、畑の岸など、植えつける場所も理解しており、接ぎ木の技術も保有している。ただし、葡萄櫨のほうが実は大きい、より収入になるというのは仲買人から得た情報であった。仲買人は製蝋所から聞いて、栽培者に伝えていた。栽培者は、仲買人・製蝋所がより高値で求めてくる実が収穫できるように、栽培技術を工夫した。

仲買人の役割も大きい。明治後期以降は製蝋所も減少し、昭和中期以降は櫨

栽培者が減少した。昭和中期以降は、製蝋所が栽培地を回って栽培者から直接、櫨の実を買い付ける場合も増えた。仲買人は栽培地周辺に居住しており、地域の事情や栽培者のことをよく把握している。どこにどういった櫨栽培者がいるのか、どの家はどの程度の櫨を出してくれるのか、といったことを把握しているのは仲買人である。栽培者の熱意にこたえて少しでも高値で買い入れることもあった。また、製蝋所が求めている櫨の品質を栽培者に伝えることも重要な役割であった。製蝋所が減少してくるなかで、ときには自分が出荷する製蝋所以外の製蝋所と競い合って、櫨の実を買い入れることもあった。二章でも触れたように、旧清水町の山産物は、有田川中下流域へ出荷される場合と、長峰山脈を越えて紀美野町・海南市方面へ出荷される場合があった。旧清水町の櫨も、他の山産物と同様、昭和中期以降で見る限り、この二方面へと出荷されていたことが分かる。

なお、製蝋所における製造工程などは調査を実施中であり、別途、報告することを予定している。また、製蝋所のさらに先には木蝋を用いて和蝋燭を製造する和蝋燭屋など、加工業者がいる。これについては未調査である。

b　葡萄櫨栽培技術の継承の特徴

平成初期には和歌山県内での製蝋所は一軒となり、平成末期には櫨栽培者も高齢化して次々と引退していった。吉田製蝋所への櫨実供給先として大口であった七良浴氏と上野氏も平成末期に櫨採取を引退した。こうした状況を受けて、櫨の実が入手困難になってきたため、吉田製蝋所も廃業を検討するようになったという。しかし、同時に京都などの和蝋燭屋からの求めがあり、有田市の脇村氏などが中心となってTeam ZENKICHIが結成され、県が協力して葡萄櫨の再産業化の動きが進行し始めている。

櫨栽培を歴史民俗的にみた場合でも、現在進行している動きは興味深い。櫨栽培は、江戸中期に有田川の中下流域で始まったが、この地域では明治時代に他の作物に転換した。昭和から平成にかけて櫨栽培は上中流域で継続した。山村での特殊な民俗技術として高齢者が継承していたといえる。ところが、現在、有田市の人びとが新たな栽培者として名乗り出て、県や製蝋所、高校を巻き込んで栽培技術を継承し、櫨・木蝋産業全体の復活を試みているのである。上野氏や七良浴氏がおこなっていた高い木に登って櫨の実を採取する方法では広まらないと考え、櫨の木を低木に仕立てて、容易に実を採取しやすいように改良しようとしている。上中流域の山村で高齢者が特殊技術として継承してきた櫨栽培が、再び下流域においてだれでも容易に栽培できるような形に変化させることで、継承しようとしているのである。

おわりに

櫨・木蝋産業を歴史民俗学的に分析する場合、今後の課題は多く残されている。筆者は和歌山県の農山村において櫨の民俗を聞き続ける予定にしている。櫨採取をしてきた古老は少なくなったが、櫨に関して知識を有する方々は多数おられる。紀美野町、有田川町以外の櫨栽培の実態も探っていく必要がある。また、製蝋技術についても把握しておく必要がある。櫨・木蝋産業については、江戸から明治にかけて一大産業であったため、全国的に文献も多数残されている。和歌山県においては、大正から昭和初期の『和歌山県山林会報』『木の国山林時報』などの文献に櫨栽培の記述がみられる。こうした文献をもとに、昭和初期の櫨の栽培奨励についても明らかにしていきたい。以上のような歴史民俗学的な櫨・木蝋に関する調査研究を実施することは、現在進行している和歌山県での櫨・木蝋産業の復活に向けた取り組みに歴史的な価値を付与

し、取り組みの意義を高めることに貢献できると思っている。今後も歴史民俗学的に和歌山県の櫨・木蝋を追求し、現在の取り組みを見守り続けたい。

（注）

（1）昭和初期には、五村の肉桂は全国的にも有名で、香料などとして重宝されていたため、五村の肉桂を紹介した報告は複数みられる。肉桂については別稿を予定している。

（2）上野氏、岩橋氏、前氏ともに、現在は北野川以外に居を移している。

（3）原則として植物名、方言名はカタカナ表記とする。

（4）Team ZENKICHI は、江戸時代に薩摩から紀州に櫨をもたらした田中善吉から名前をとっている。

（5）林業試験場の坂口氏によると、化学薬品を使わずに「玉締め式圧搾機」で木蝋を搾っている製蝋所は全国で二軒、葡萄櫨一〇〇％の木蝋を搾っているのは全国で一軒、吉田製蝋所のみであるという。

（6）紀美野町志賀野地区に葡萄櫨の原木がある。紀美野町で最後まで櫨を採取し続けてきた七良浴氏もこの地区の方である。このような縁により、志賀野地区の有志が葡萄櫨の接ぎ木に取り組み、志賀野地区の葡萄櫨栽培を受け継ごうとしている。

（7）ある程度書き上げた原稿を、令和四年（二〇二二）七月に前氏を通じて、上野氏に渡していただいた。八月八日に、お渡しした原稿の確認を含めて、再度、聞き取りをおこなった。

（8）令和四年（二〇二二）四月から六月にかけてはコロナの新規感染者は落ち着いていたため、比較的順調に調査を進めることができた。しかし、七月中旬以降、和歌山県でも急速に感染が拡大し、過去最高値を更新する日が続いた。そのため、七月二七日の聞き取りは、岩橋氏家族が北野川の家に戻られた際に、縁側など屋外で聞かせていただいた。

（9）棕櫚のことを有田川町では、シュウロと発音する人が多いが、シュロと発音する方もいる。原則として植物名、方言名はカタカナ表記とする。この場合は、語りの中の表現なので「シュロ」と表記しておく。

（10）肉桂のことを有田川町の人々はニッケと発音することが多い。

（11）語りで出てくる山櫨は、ヤマハゼであるのか断定はできていない。田中善吉がもたらしたハゼノキで、葡萄櫨に継いでいない実が小さい櫨という可能性もある。

（12）有田川町中井原（旧金屋町）の東重太郎氏の家で平成初期まで大国屋という製蝋所をしていた。苗字はヒガシであるが、清水町方面の人びとはこの製蝋所のことをアズマと呼んでいる。

（13）『清水町誌　上』には、高時と表記されている〔清水町誌編さん委員会　一九九五〕。タカトキの上のほうまで上野氏の田があったことは、親戚の大久保家宏氏もよく覚えていた。高時は上浦の北斜面である。

（14）『清水町誌　上』には、柿硲、墨屋谷、助常と書かれている〔清水町誌編さん委員会　一九九五〕。なお、柿硲、墨屋谷は上浦の北斜面であるが、助常は下浦の北斜面になる。

（15）有田川町の人びとは、木の樹液流動が活発な時期のことをツワルと呼んでいる。

（16）和歌山県林業試験場作成の「上野保二氏の「接ぎ木」技術」によると、上野氏は「春芽」は春に伸長した茶色の芽、「夏芽」は春以降に出た緑色の芽、と語っていたという。

（17）台木と穂木をどこまで削るのか、という質問は、令和四年（二〇二二）

八月八日に再度質問したものである。林業試験場の坂口氏より、穂木の皮を薄く削るだけでは台木と穂木の接合が大円形と小円形とを合わすことになり、ピッタリと接合するのが難しく、活着率は六〇～七〇％程度が限界であったが、最近、脇村氏は、穂木も木質部まで削って面を平にし、台木に接合させると、大円形と平面を合わすことになり、ピッタリと合わさるようになり、活着率も七〇～九〇％と大きく向上したとの報告を受けている、という情報をいただいたため、上野氏に再度確認の意味で質問することにした。

(18) 林業試験場の坂口氏によると、上野氏からの接ぎ木技術伝授の際に、接ぎ木テープがない時代には、穂木と台木の接合部分は、わら縄で巻いて固定し、さらに乾燥から守るため、接合部分に赤土を練って団子状に覆い棕櫚皮で包むか、水分を含んだ水苔を棕櫚皮で包んだ、と教えてもらったという。しかし、今はよい接ぎ木テープがあるので赤土や水苔で覆わなくても乾燥することはない。念のために昔やった水苔で覆う方法をやって見せるが、今日は棕櫚皮がないのでビニールテールで覆うことにした、という説明を受けたという。

(参考文献)

有田川町教育委員会編　二〇一七　『国指定重要無形民俗文化財　杉野原の御田舞映像記録解説書』　有田川町教育委員会

有田郡編　一九一五　『和歌山県有田郡誌』　有田郡（同編　一九七一　『有田郡誌』名著出版　復刻）

有田市誌編集委員会編　一九七四　『有田市誌』　有田市

安藤精一・五来重監修　一九八三　『日本歴史地名大系　三一　和歌山県の地名』　平凡社

上川芳実　一九七八　「明治期在来産業の展開　―日高郡木蝋業を中心に―」安藤精一編『和歌山の研究　三　近世・近代編』清文堂出版

上野一夫　二〇一七　「櫨庄屋」『熊野誌』六三

内子町町並保存対策課・内子町産業振興課編　一九九三　『ハゼノキ今昔物語―Re-local & Re-global―再ハゼトピアへの道』　内子町町並保存対策課・内子町産業振興課

海南市立歴史民俗資料館　一九九一　『展示解説集　一〇　あかりとくらしあかりの歴史・海南の灯芯・木ろう・京都の和ろうそくづくり』　海南市立歴史民俗資料館

笠原正夫　一九七三　「紀州藩の殖産政策と蝋燭仲間」安藤精一編『近世和歌山の構造』名著出版（のち同　二〇〇二『紀州藩の政治と社会』清文堂出版）

「角川日本地名大辞典」編纂委員会編　一九八五　『角川日本地名大辞典　和歌山県』　角川書店

笠原正夫　一九九五　「田中善吉の努力で藩全域に広がった櫨栽培と木蝋生産・有田」『江戸時代　人づくり風土記　三〇　ふるさとの人と知恵　和歌山』農山漁村文化協会

金屋町誌編集委員会編　一九七三　『金屋町誌　下』　金屋町

吉備町誌編纂委員会編　一九八〇　『吉備町誌　下』　吉備町

近畿民俗学会編　一九七六　『近畿民俗』六六・六七・六八

日下部兼道　一九三三　「葡萄の櫨起源」『木の国山林時報』九三

国学院大学民俗学研究会編　一九六二　『三十五年度民俗採訪　和歌山県有田郡金屋町旧五西月村　長野県上水内郡小川村』　国学院大学民俗学研究会

坂口和昭　二〇一九　「葡萄ハゼの復活へ向けて～研究と普及の連携～」『和歌山県林業試験場だより』八一
清水町誌編さん委員会編　一九八二　『清水町誌　史料編』　清水町
清水町誌編さん委員会編　一九九五　『清水町誌　上』　清水町
清水町誌編さん委員会編　一九九八　『清水町誌　下』　清水町
新谷益太郎　一九九七　「郷土の偉大な先覚者　今井嘉翁を憶う」『清水町文化』一八
高垣英一編　一九三四　『紀伊有田郡先賢伝記　一』　有田郡教育会
高野政吉（安諦尋常高等小学校）編　一九三六　『教育経営　第三輯　郷土生活様式』　安諦尋常高等小学校
中岡紀子　二〇〇三　「内子町の和蝋燭」日本ナショナルトラスト編『自然と文化』七二
中島康博　一九八〇　「ハゼ」倉田益二郎編『林業改良普及双書　七五　特用樹種の仕立て方と流通』全国林業改良普及協会
仁井田好古編　一九一〇　『紀伊続風土記　二』　和歌山県神職取締所（一九九〇　臨川書店　復刻）
二沢久雄　一九八一　「日物川のむかし」『清水町文化』四
藤井弘章　二〇一九　「和歌山県における櫨の民俗　―紀美野町の栽培・採取を中心に―」『民俗文化』三一
藤井弘章　二〇二二　「和歌山県高野町における棕櫚の民俗　―生育限界地周辺での棕櫚栽培―」『民俗文化』三四
古島敏雄　一九六一　「諸産業発展の地域性　―明治初年における―」地方史研究協議会編『日本産業史大系　一　総論編』東京大学出版会
堀内信編　一九三二　『南紀徳川史　一一』　南紀徳川史刊行会（一九九〇　清文堂出版　復刻）
正木八十八　一九三八　『日本の櫨と木蝋』　明文堂
三木明音・横田沙羽子・中村巴菜・鞍雄介　二〇一九　「抹消天然記念物「葡萄櫨の原木」調査報告『民俗文化』三一
三角隆二（城山西尋常高等小学校）編　一九三三　『教育の基礎としての郷土研究』　三角隆二（城山西尋常高等小学校）
和歌山県教育委員会社会教育課編　一九六五　『和歌山県民俗資料緊急調査報告書　県下30地区について』　和歌山県教育委員会社会教育課
和歌山県統計協会編　一九三八　『和歌山県特殊産業展望』　和歌山県統計協会
和歌山県内務部編　一八九三　『和歌山県農事調査書』下　和歌山県内務部（同編　一九六三　『明治文献研究シリーズ　二　和歌山縣農事調査書　下』明治文献研究会　収録）
和歌山県立博物館編　二〇一七　『有田川中流域の仏教文化　―重要文化財・安楽寺多宝小塔修理完成記念―』　有田川町教育委員会

（付記）

本稿の調査は、おもに近畿大学民俗学研究所の調査として実施したものである。ただし、財団法人阪本奨学会の助成も部分的に使わせていただいた。この調査は、和歌山県有田川町の方々のみならず、和歌山県で櫨・木蝋産業の復活を目指す方々のご協力によって実施することができた。

有田川町では北野川の上野保二氏・岩橋よし子氏、および二川の砂子和寛氏・ゆき子氏夫妻からの聞き取りがなければ本稿はできなかった。また、北野川出身の前康博氏、粟生の大田貢氏は聞き取りさせていただいたのみならず、多くの方々をご紹介いただいた。とくに、前氏には令和四年五月～七月にかけ

て、多くの調査に同行いただいた。

このほか、二沢の東本匡弘氏、二川の林口泰治氏、楠本の前島義郎氏、鶴田倫雄氏、下湯川の大久保家宏氏、西脇直次氏、清水の小向晃夫氏、中井原の東重太郎氏に聞き取りさせていただいた。このほか、前康博氏とともに有田川町の古文書を読む会のメンバーである東璋氏、中伸一氏にもお世話になった。

吉田忠司氏・悦子氏夫妻（吉田製蝋所）、脇村正次氏（Team ZENKICHI）、中西宣博氏（Team ZENKICHI）、坂口和昭氏（和歌山県林業試験場特用林産部部長）、佐野豊氏（和歌山県海草振興局農林水産振興部副部長）、西弥生氏（調査時は和歌山県有田振興局農林水産振興部林務課課長）、片岡宏美氏（和歌山県有田振興局農林水産振興部林務課）には、櫨・木蝋に関する歴史民俗学的な研究に理解をしてくださり、現在の取り組みに関する情報を提供いただくとともに、話者の紹介など、さまざまな面で協力いただいた。

紀美野町の七良浴正氏、鞍雄介氏（りら創造芸術高等学校教頭）、志茂梨恵氏（りら創造芸術高等学校教諭）、紀美野町志賀野地区のさみどり会、杉本小夜氏（和歌山県林業試験場特用林産部）、山下桃子氏（調査時は和歌山県海草振興局農林水産振興部林務課）、國武晃軌氏（和歌山県海草振興局農林水産振興部林務課）、御前明良氏（有田市文化財保護審議委員）、仲里長浩氏（有田中央高等学校教諭）、川口修実氏（有田川町教育委員会社会教育課）、木谷智史氏（調査時は有田市教育委員会生涯学習課文化振興係）、矢倉嘉人氏（海南市教育委員会生涯学習課文化振興係）、木田順子氏（アロマテラピーコンサルタント）にもお世話になった。

このほかにも、多くの方々のご協力により本稿ができあがった。あらためて心より感謝申し上げたい。筆者の櫨・木蝋に関する歴史民俗学的な調査は現在も継続中である。本稿および今後の調査が、和歌山県における櫨・木蝋産業の復活に少しでも貢献できることを願っている。

なお、注記した以外の写真は筆者撮影のものである。